

東京ビジュアルアーツ・校友会 1965▶2019

FOCUS 44

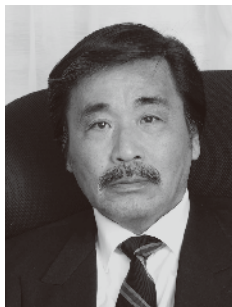
最終号



星峠 朝もやの中 田植え前の朝日を待つ 撮影：宮本 宏



ご挨拶



東京ビジュアルアーツ・校友会
会長 宮本 宏

いよいよ半世紀以上続いた東京ビジュアルアーツ校友会も、本年をもって解散することとなりました。半世紀以上の間、いろいろな方にご尽力頂きました。ありがとうございました。

初期の頃は御茶ノ水の校舎の中で、終盤の頃は諸河くんの事務所で。

ご尽力いただいた方の名前をあげれば 50年分 きりがありません。

最後までお付き合い頂いた諸河、平野、森脇、須山、坂口さん、日比野先生、お世話になりました。全員で企画した「校友会創立50周年記念行事」が成功裡に終わったことを喜ばしく思います。

会員の皆様のご協力に感謝いたしております。ありがとうございました。

20代で写真専科校友会と関わった私ももう70代。

あとは若い同友会の方々によりしくお願いします！



「校友会創立50周年記念行事」

校友会50周年に記念誌の発行と写真展をやるということで、1年ほどの猶予を持って企画をスタートさせ、数名の卒業生に集まって頂き、委員会を発足させました。

記念誌は「2/50」のタイトルで、在籍した2年間を意図して、その当時の思い出話などを沢山の会員に寄稿いただきました。同時に開催の写真展は50周年なので、50名の卒業生に登場いただくという企画で始めましたが、最終的には80名を超える作品を集めて四谷のポートレートギャラリーで開催。初日には盛大なパーティーも催され、写真界の著名な先生方、メーカー各社など、卒業生を含め160名をこえる人数が集まり盛大にお祝いいたしました。



ご挨拶



東京ビジュアルアーツ
学校長 篠田 真千

校友会の皆様、初めまして。

東京ビジュアルアーツの学校長、篠田真千と申します。

校友会の皆様におかれましては、東京ビジュアルアーツへの多くのご支援、まことにありがとうございます。

2019年より新しい同窓会組織である、同友会がスタートしました。これまで、校友会に担っていただいていた卒業生の皆さんのコミュニティとしての活動をバトンタッチさせていただき、多くの卒業生や在校生同士をつなぐ場として、活動をさせていただきます。

長く活動をされていた校友会にはまだまだ遠く及びませんが、全国ビジュアルアーツから72,000人以上のプロを輩出してきた学校のネットワークをさまざまな方々が活かすことができるコミュニティを目指して、運営を行っていきますので、引き続きご支援を賜りますよう、お願い致します。

ご挨拶



東京ビジュアルアーツ同友会
会長 高山 太郎
(フリー編集者・ライター)

この度、同友会の会長を務めさせていただきます、高山太郎と申します。

私にとって、在学中にいただいた校友会奨励賞が、卒業後、出版業界で仕事をしていく上で大きな自信と足がかりになりました。

いっぽうで、今の自分を形成し駆動させているのは、そうした分かりやすい栄誉だけではなく、クラスメイトや先輩・後輩、そして講師や教員の方々と共有した様々な思い出や、些細な出来事だったりします。端的に言えば、「人に恵まれている」。このことがクリエイティブな業界で活動する上で、何事にも代え難い基礎となっています。

同友会では、校友会が築き上げてきた「人のネットワーク」を大切に、在學生と卒業生が交わる関係性のプラットフォーム作りをめざします。人との出会いは意図的／強制的に生まれるというより、多分に偶然性を含んでいます。東京ビジュアルアーツの学生には、同友会というネットワークが「ある」こと自体の安心感をベースに、そんな偶然性の海に自らを漂わせてほしいと思います。

東京ビジュアルアーツ・校友会の歴史

1965年(S40)頃	第1期生の会「写真会」「鳥の会」	
1967年(S42)	11月26日 東京写真専門学院・校友会設立 第1回総会 東京写真専門学院602教室 初代会長・西川和雄(40年度卒)	
1968年(S43)	5月26日 第2回総会 東京写真専門学院602教室 藤井秀喜先生を囲んで座談会	
1969年(S44)	2月15日 FOCUS Vol.1号発行(S44年2月10日発行)B5判 表紙写真：武藤 義 鈴木恒夫氏「写真界の現状について」講演会： 日仏会館ホール(卒業生会員、在校生合同) 2代目会長・岸 伸雄	
1970年(S45)から	FOCUS Vol.2(保存紙が無く内容・出版年 不明) 表紙写真：宮本 宏 FOCUS Vol.3(保存紙が無く内容・出版年 不明)	FOCUS Vol.1
1976年(S51)		
1977年(S52)	3代目会長・米本義光	
1978年(S53)		
1979年(S54)		
1980年(S55)	FOCUS Vol.4号発行(12月10日発行：東京写真専門学校校友会)B5判 表紙写真：市川寿夫 会長：米本義光／副会長：市川寿夫 9月27日 総会・懇親会 水道橋後楽園飯店	
1981年(S56)	6月2日 FOCUS Vol.5号発行(11月15日発行)B5判 表紙写真：鈴木克彦 お茶ノ水校舎にタモリを招き懇親会 11月14日 総会・懇親会 東條会館・四谷半蔵門	
1982年(S57)	12月5日 FOCUS Vol.6号発行(12月1日発行)B5判 表紙写真：松浦正博 総会・懇親会 SCOTCH BANK 銀座不二屋ビルB1 第6回「写真の集い」ウクレレ漫談・牧伸二／司会・柳家三梧楼	
1983年(S58)	FOCUS Vol.7号発行(58年4月1日発行)B5判 表紙写真：渡辺茂夫 「イメージ新 堅いお話しなし 銀座にドカーン！と勢揃い」の タイトルで総会・懇親会報告 SCOTCH BANK 銀座不二屋ビルB1 152名の出席	
1984年(S59)	9月30日 FOCUS Vol.8号発行(58年12月1日発行)B5判 表紙写真：小出正則 FOCUS Vol.9号発行(59年9月10日発行)B5判 表紙写真：原富治雄 総会・懇親会 お茶ノ水プラザ コンピューターを導入の記事	FOCUS Vol.10
1985年(S60)	4月 川口政雄先生が亡くなられる 川口政雄先生を偲ぶ会実施 FOCUS Vol.10(60年10月1日発行)B5判 表紙写真：ノブオ中村 10月5日 総会・懇親会 お茶ノ水プラザ	
1986年(S61)	4月 市ヶ谷新校舎へと移転 FOCUS Vol.11(61年10月1日発行)B5判 表紙写真：エルスケンのために学校前に集まる学生 作者不明 小幡章校長の挨拶、新校舎紹介記事 5月24日 落成記念パーティーに合わせ「新校舎落成記念 写真展」を エントランスギャラリーで、卒業生多数の参加で開催 「エルスケン氏もお祝いに駆けつけてくれました」と記事 10月4日 総会・懇親会(新校舎お披露目と第一回FOCUS展) 新校舎エントランス 1階エントランスギャラリー「第一回FOCUS展」 卒業生写真家3名による写真展 ノブオ中村 昭和42年卒 「ハーレムの瞳」ニコンサロン パーマメントコレクション(ニューヨーク市立図書館/ニューヨーク市立博物館) 内藤律子 昭和48年卒 「わんぱく大行進」ニコンサロン 木原義敬 昭和41年卒 「現代戯写」86年・準太陽賞 11月 コンピューター購入 12月 校友会事務局員、雇い入れ コンピューター作業等事務処理	
1987年(S62)	10月 FOCUS Vol.12(62年10月1日発行) 表紙：新校舎イラスト 総会・懇親会 新校舎エントランス 米本会長から坂口会長へとバトンタッチ	FOCUS Vol.11

- 1988年(S63) FOCUS Vol.13(63年10月1日発行)タブロイド版
第4代会長に坂口哲也氏が就任
- 1989年(H1) 10月1日 総会・懇親会 新校舎エントランス
FOCUS Vol.14(H1年9月30日発行) B5判
9月30日 総会・懇親会 新校舎エントランス
1月 校友会費を3,000円から5,000円へと値上げするよう学校へと要望(90年入学者より適用)
4月 校友会(坂口会長)より学校図書室へ写真集など144冊を贈呈・学校はこの図書を「校友会文庫」として学生の勉学の一助とするため公開するとしている
- 1990年(H2) FOCUS Vol.15(H2年9月30日発行) B5判
9月29日 総会・懇親会 新校舎エントランスホール
10月 寄贈本としての予算を15万円とり、学校から希望図書リストをいただき購入・寄贈する
- 1991年(H3) FOCUS Vol.16(H3年9月30日発行) B5判
9月28日 総会・懇親会 新校舎エントランス
寄贈本としての予算を15万円とり、学校から希望図書リストをいただき購入・寄贈する
- 1992年(H4) FOCUS Vol.17(H4年9月30日発行) B5判
金沢 靖氏 講演会開催(学校文化祭)
10月3日 総会・懇親会 新校舎エントランス
学校名を東京写真専門学校から東京ビジュアルアーツに変更
名簿原簿のコピー作業を学校で開始
- 1993年(H5) FOCUS Vol.18(H5年9月30日発行) B5判
9月28日 総会・懇親会 新校舎エントランス
校友会名をビジュアルアーツ・校友会に変更を検討
- 1994年(H6) FOCUS Vol.19(H6年9月30日発行) B5判
学校名変更にもない「東京写真専門学校・校友会から
東京ビジュアルアーツ・校友会に変更を発表」記事
10月1日 総会・懇親会 新校舎エントランス
コンピューターを購入MS-DOS 5.0A/WIN3.1/PC9821/RAM5.6M/HDD240
データベース入力開始
韓国同門会・発足の案内が届く
- 1995年(H7) FOCUS Vol.20(H7年9月30日発行) B5判
「卒業生短信」コーナーが始まる
10月7日 総会・懇親会 新校舎エントランス
名簿データベースを更新
文化祭・講演会等補助金を支払い
- 1996年(H8) FOCUS Vol.21(H8年9月30日発行) B5判
10月5日 総会・懇親会 新校舎エントランス
コンピューターの修繕
阪神大震災に義援金を贈る
- 1997年(H9) FOCUS Vol.22(H9年9月30日発行) B5判
10月4日 総会・懇親会 新校舎エントランス
韓国・台湾留学生会発足へ働きかけ
文化祭に校友会コーナーを設け参加、校友会紹介
- 1998年(H10) FOCUS Vol.23(H10年9月30日発行) B5判
11月3日 総会・懇親会 新校舎エントランス
1月 植田カナヲ先生が亡くなられる 3月偲ぶ会、学校で開催
韓国同門会、写真展に花代とFOCUS送料として送金



FOCUS Vol.19



FOCUS Vol.23



クラス合宿にて 右は西山卓也先生



卒業記念写真

東京ビジュアルアーツ・校友会の歴史

1999年(H11)	FOCUS Vol.24(H11年9月30日発行)B5判	
11月3日	総会・懇親会 新校舎エントランス 関本幸隆先生・秋田實先生が亡くなられる 韓国・同門会と連絡・交流始まる コンピューター買い替え NEC	
2000年(H12)	FOCUS Vol.25(H12年9月30日発行)B5判	
10月28日	総会・懇親会 新校舎エントランス 安達健之助理事長が亡くなられる 校友会メールアドレス、ホームページ始まる 入学時會費の他に、卒業後年会費の仕組みでの「維持會費制度」を始める 入学時會費、在学中+卒業後3年以降、年会費5年分2,000円とする 台湾震災に義援金を贈る	
2001年(H13)	FOCUS Vol.26(H13年9月30日発行)B5判	
10月6日	総会・懇親会 新校舎エントランス 学校長に中嶋好仁氏就任する	FOCUS Vol.24
2002年(H14)	FOCUS Vol.27(H14年9月30日発行)B5判	
10月6日	総会・懇親会 新校舎エントランス 札幌から水本一義先生がご出席になる	
2003年(H15)	FOCUS Vol.28(H15年9月30日発行)A4判カラー横書き	
11月1日	総会・懇親会 新校舎エントランス	
2004年(H16)	FOCUS Vol.29(H16年9月30日発行)A4判カラー	
10月30日	総会・懇親会 新校舎エントランス おやじ倶楽部写真展「6人の眼」フォトスペース光陽2で開催 入学時會費改正5,000円から8,000円へと検討するが、断念 FOCUS Vol.30(H17年9月30日発行)A4判カラー 学校創立40周年記念に花を贈る 講演会・パーティー	
2005年(H17)	FOCUS Vol.30(H17年9月30日発行)A4判カラー	
11月5日	総会・懇親会 503番教室	FOCUS Vol.28
2月	おやじ倶楽部写真展「第2回 七人の眼」	
2006年(H18)	FOCUS Vol.31(H18年9月30日発行)A4判カラー	
11月4日	卒業生全員(約2万名)への配布は最終号 以降は卒業後3年間と維持會費會員のみへの配布となる 総会・懇親会 503番教室 藤本四八先生が亡くなられる	
2007年(H19)	FOCUS Vol.32(H19年9月30日発行)A4判カラー	
11月3日	総会・懇親会 503番教室	
11月	前校友会長・米本義光先生が亡くなられる 玉野裕晋先生が亡くなられる コンピューターを新規購入	
	2月 おやじ倶楽部写真展「第3回 七人の眼」	
2008年(H20)	FOCUS Vol.33(H20年9月30日発行)A4判カラー	
11月1日	総会・懇親会 503番教室 2010年より維持會費を年会費2,000円に改正	
2009年(H21)	FOCUS Vol.34(H21年9月30日発行)A4判カラー	FOCUS Vol.31
10月31日	総会・懇親会 503番教室	
2月	おやじ倶楽部写真展「第4回 七人の眼」	



校友会懇親会にて 1 中嶋前校長と坂口名誉会長 2 米本元会長(故人)と小林晃先生(故人) 3 松島進先生(故人) 4 左が伊藤滋先生(故人)

2010年(H22)	FOCUS Vol.35 (H22年9月30日発行) A4判カラー 2010年より維持会費を年会費1,000円に改正	
11月6日	総会・懇親会 503番教室	
2011年(H23)	FOCUS Vol.36 (H23年9月30日発行) A4判カラー	
11月5日	総会・懇親会 503番教室 第1回・校友会創作奨励賞授与	
2012年(H24)	FOCUS Vol.37 (H24年9月30日発行) A4判カラー	
11月3日	総会・懇親会 503番教室 第2回・校友会創作奨励賞授与	
2013年(H25)	FOCUS Vol.38 (H25年9月30日発行) A4判モノクロ	
10月12日	総会・懇親会 アルカディア市ヶ谷・私学会館 第3回・校友会創作奨励賞授与 校友会住所を池袋サンシャインの私書箱に変更	
2014年(H26)	FOCUS Vol.39 (H26年9月30日発行) A4判モノクロ	
10月24日	総会・懇親会 アルカディア市ヶ谷・私学会館 校友会50周年に向け、記念事業として写真展・記念誌の出版を決定する	
12月	実行委員会を設立し、写真展準備、原稿募集を始める 第4回・校友会創作奨励賞授与	
11月	学校は学校創立50周年パーティーを市ヶ谷校舎で開催	
2015年(H27)	FOCUS Vol.40 (H27年9月30日発行) A4判モノクロ	
10月24日	総会・懇親会 アルカディア市ヶ谷・私学会館	
11月26日～12月6日	「校友会創立50周年記念写真展」ポートレートギャラリーで約80名の卒業生の参加を得て開催 「創立50周年記念誌・2/50」を出版 写真展・出版にあわせて「校友会創立50周年記念パーティー」を、写真展会場に近しい主婦会館エ フプラザで写真界関係者、出品者など166名を集めて盛大に開催する 第5回・校友会創作奨励賞授与 ファーストマグナム展に協賛	
2016年(H28)	FOCUS Vol.41 (H28年9月30日発行) A4判モノクロ	
10月8日	総会・懇親会 アルカディア市ヶ谷・私学会館 卒業生の日根野晋一氏が学校長に就任 同友会発足準備のためFOCUSにページを割いて宣伝する	
2017年(H29)	FOCUS Vol.42 (H29年9月30日発行) A4判モノクロ	
10月28日	総会・懇親会 アルカディア市ヶ谷・私学会館 学校への質問状送付を決議 新入生からの会費を止め、維持会費会員だけの会費収入となる 教壇に立たれた児島昭雄先生が亡くなられる	
2018年(H30)	FOCUS Vol.43 (H30年9月30日発行) A4判モノクロ	
10月28日	総会・懇親会 アルカディア市ヶ谷・私学会館 学校への質問状：回答は、同友会は準備中との事 定期預金を解約、普通預金に繰り入れ 今回送付FOCUSに同封した維持会費用紙が最終振込用となる 初の卒業生校長だった日根野氏が退職、新校長が選任される	
2019年(R1)	FOCUS最終号 Vol.44 (R1年9月30日発行) ようやく「同友会」が成立し活動を始めた模様 先生方の「おやじ倶楽部写真展」も9回目となり沢山の卒業生が集う	



校友会創立50周年記念写真展



2015年に開催された校友会創立50周年記念パーティーのひとコマ



最後のFOCUSに寄せて

本号が最終となる「FOCUS」の原稿を
校友会各位から募集したところ、
多くの方々からご寄稿をいただきました。

6410052 佐藤 光夫

定時で退社し都電で通った入学から半世紀を ふり返る

令和元年から遡ること55年の1965年に入学。すでにPR関係の仕事に従事しており、経済誌のカット写真や化粧品会社の記録などクライアント関連の企業写真に携わっていた。だが、写真への思い入れは強く、ならば本格的に写真技術を学ぼうと当校に入った。当時はまだ残業規制も緩やかだったので夕方5時過ぎには社を飛び出して、銀座四丁目から11系統の都電に乗り麹町で下車、本校へ通う毎日だった。

座学は細江英公氏、丹野章氏など、貴重な講師にもめぐり合う事ができた。実技は、夜なのでスタジオ撮影や近くの街、土手などに繰り出して撮影。デイライトは、もっぱら日・祭日を使って課題制作に明け暮れた。こんななか、課題制作で銀座数寄屋橋で当時流行のマンボズボンやアイビールックの若者を狙っていたら、あやうく蹴っ飛ばされそうになったり、はたまた夜の商売に出かけるキレイどころのママさんを増感を念頭にストロボなしで追いかけるなど、怖いもの知らずの若さの勢いで撮影したことも。

一方、当時はデジタル時代が来るとは思いもよらぬご時世でフィルム撮影の全盛期。校内の現像室で印画紙現像していると、後ろから先生が「やり直し！」とNGの声がかかるなど、ある意味の厳しさの影響もあって、それが後々たいへん役立った。

また勤めていた会社の上司から依頼されたTV画面を

接写して一晩で仕上げたり、同僚先輩に頼まれた古い壺のコントラストが強いネガの引き伸ばしで、覆ったり焼き込んだりし

ながら、何とか壺の質感を復元し、出来栄えに喜ばれたことなど写真勉強中の励みになった。

卒業制作は自宅の限られたスペースで制作に没頭、全紙バットが置けないため、半切バットを使って全紙を現像、組写と共に何とか提出期限に間に合わせた。

今思えば冬の寒い朝、一番電車で乗り付け、都電の早朝風景を撮影し、とんぼ返りで自宅に戻り、再び出勤ということもあった。

時代は変わり、スマホやタブレットで老若男女が手軽に写真を楽しめる昨今だが、センスだとか向き不向きはあっても、写真作品に対する“目”は一喜一憂で培われるものではない、と考えるのだが老いのたわごとだろうかー。

当校で学んだ土壌を絶やさぬためにも、加齢なりの写真感性を磨くよう写真へは対峙しているつもり。経験に裏付けられたベテランの作品もよいが、これから羽ばたく若い人たちの作品にも関心を持ち、例えば大学の写真部の展示会などにも足を運び、批評批判などを通し切磋琢磨してゆくことも一法といえようという小生だが、撮りためた整理のついていない写真を傘寿目前にしてこの歳まで持ち込むのかと思うと、いささかゾーッとする昨今である。



東京写真専門学院から専門学校へ

50年前東京オリンピックが終わり、日本国内でも、少しずつ外国製品が買えるようになりました。コダックの製品も、エクタクロームフィルム、現像液なども手に入るようになり、カラー現像所等も増えてきました。

当時、銀座5丁目並木通りに住んでいた私の周りには、写真関係のショップや事務所が沢山存在していました。そんな関係で私の住まいの6階にありましたカラー現像所で、8×10の現像をお手伝いしたりもしていました。東京が水不足で困った時に、隣のビルの屋上タンクから水を運んであげたり、忙しい時に良く声をかけられたりしていました（いわば大学生のお助けマンでした!）。エクタクロームの大きなフィルムを現像液から取り出した時には嬉しくて感動もしました。（もし失敗したらどうするのかな?）

その周りの写真関係の方々に、「写真が好きならば大学を卒業したら、写真の勉強をなささいよ!」と声を掛けられてもいました。そんな時期に私は大学を卒業し、秋になり、早く写真の勉強したい!という想いが先に立ち、先輩たちのお勧めの、東京写真専門学院に入学を決めました。『まだ仮校舎らしいけど本校舎が建築中との事らしい!』とも聞いておりました。

秋晴れの日に、千代田区の靖国通りから、大妻通り三番町を超えて、右折をし、右側にローマ法王庁大使館、その先の5階建て位の小さなビルに、学校事務所の受付がありました。話を聞くと実際に写真を勉強する場所はここではないようでした。受付で申し込みをし、帰りに行人坂を下り、東郷坂を下り靖国通りから市ヶ谷駅に行き国電にて帰宅しました。今思えば帰りに「勉強する校舎」を見るべきでした???

次の週に学校事務所で聞くと写真の教室は、このビルの反対にある九段小と大妻講堂の間にありますとのことで、探し歩き、たどり着いたのが「内田ビル」?という古びたビルでした。「ヤラレタ!!俺は皆に騙されたのかな?」とボーッと見ていました。しばらく立ち尽くすその横をビルの中に入ってゆく人たちに付いて、自分も入りました。

入口には「三階教室へ」と案内が出ていました。エレベーター無しの狭い階段を昇って行くと、20坪位の部屋に25名くらいの人がいきました。職員か先生なのか誰だかわれませんが説明があり、帰りに二階の暗室を見ました。部屋の周りに見たことのない引き伸ばし機、

真中の流しにバット、それだけの貧弱な施設には残念な思いが先に立つようでした。一階のスタジオにはスクープリイトとスポットライトが何本か有りました。小さな部屋にフィルム現像の深タンク、その狭さは二人が入れるかな??要するに、そこは普通の低い天井・古い事務所ビルの事務室で、ヤッツケ写真用に改装したなどと言える程度のものでありませんでした。これを見て、騙された思いがあとを引きました。その時、来春に新校舎が出来るなどとは想像もできませんでした。でも、不思議なことに道路側には駐車スペースが3台分ありましたネ。

授業が始まり、そこには不思議な人たちが40人位いたかな、私も不思議な少し年上者でしたネ!仲良しもすぐ出来ました。当初女性が7名いた記憶があります。

二年間で卒業生となったのは女性2名と男子12名の合計14名でした。入学時に聞いた話では入学希望者が70数名いたとか??生徒の中にはタクシーの運転を職業にしていた人もいました。ヤクザっぽい人などいて、それはとても不思議な集まりでした。でも、不思議な良い人達でもありました。

先生方は関本先生、柳先生、西山先生、日比野先生、水本先生、武田先生、一年半先輩の武藤さん、西川さん、半年先輩には中山さん、菅原さん、沢山の方々がおられました。なかでも亡くなられた武藤義先輩には、私が入学して直ぐに多くのアドバイスを頂きました。コダック製品が長瀬産業の扱いになり、販売されたものにプロフェッショナル・シリーズやコダック・カラーデータガイド等有益なものが多くありました。

長生きを少しし過ぎたせいか、当時の事を思い出すと今では多くの先生方、先輩方、同期生、校友会の皆様方、後輩の皆様さま方有難うございましたとの気持ちがあふれます。感謝、感謝で有ります。

入学から半年後、市ヶ谷校舎からお茶ノ水校舎へと引っ越しをいたしました。その時目にした物は市ヶ谷の校舎とはケタ違いの豪華さでビックリでした。サイカチ坂に建築された新校舎は、市ヶ谷の古い事務所ビルの校舎で勉強した生徒さんには、キツネにつままれたような少し信じられない思いでした。スタジオ3・暗室3、アシスタントルーム、多くの教室、学生食堂等と設備は充実していきました。

それにとまなうようにして生徒数の増加もあり、その数の多さにも驚きました。時代の要求?数年にして、

これほどの変化があるのかと大変な驚きでした。二年後には学校名も学院から東京写真専門学校と変わりました。新校舎で授業が始まりますと、多くの著名な先生方がおられまして、特別講師には三木先生、細江先生、川口先生、ほかにも多くの先生方がいらっしゃいました。私ども在学中に先生方のご指導で、千葉の国民宿舎・西崎荘。伊東温泉東海館・伊豆海洋公園の合宿勉強会と素晴らしい授業が続きました。

クラス担任は西山先生で、日比野先生、アメリカ帰りの岩館先生にも教えていただきました。当時の授業では家からシルクハットを持ち出して、コダック撮影マニュアル「スポットライト」を使ってのAスタジオでの撮影等を行った事を思い出します。

冬休みの宿題・「冬景色13枚」では、私は会津地方に旅をしました。先日行われた諸河先生の軽便鉄道の

写真展を見て、川桁～沼尻間を走っていた軽便鉄道がある事を発見し、昔の冬景色の宿題を思い出して感激いたしました。私の冬休みの宿題のうちの一枚、川桁駅の本線で雪の中を走る蒸気機関車から投げられるタブレットの撮影も懐かしく思い出しました。

学校が楽しい、そんな時期に校友会は創立されてゆきました。卒業前の中山先輩、皆さま方から会費として700円を教室で徴収させて頂きました。その半年後に我々14名の卒業生から会費として金1,000円を集め、合計して集まった金額40,000円を西川会長と大切に握りしめて、中央区の湊にある印刷屋さんに宜しくお願いに行きました。これが、我々校友会の記念すべき校友会新聞「FOCUS・1号」となりました。

自分勝手な思い出を書きならべてしまい申し訳ございません。

6600032 渡邊 英昭

「写真の力」を見極めたい

ここ10年ほどの写真のあり方の変化の大きさには、業界関係者誰もが将来どうなるかの見通しもつけ難いと感じさせられているに違いない。ミラーレスカメラの登場のような嬉しい話もあるが、スマートフォンの浸透でカメラが売れなくなっているという寂しい話もある。簡単に撮影できて、簡単に加工できるという手軽さに加え、簡単にSNSでシェアできる、発信できるという利点を考えれば、スマートフォン付属のカメラの方が手軽で良いと感じる人たちが多くても不思議ではない。

それに伴って、写真の質についても見方が変わって来ている。プロの写真でなければという志向が薄れ、プロカメラマンの仕事は厳しくなるいっぽうだ。

そんな時に会ったのが、ノルウェーの刑務所で行われている写真を使った更生プロジェクトだった。もともとは精神病院で行われていたプログラムを刑務所向けに調整したものだ。

30枚ほどの写真をテーブルに並べ、参加している受刑者たちの一人がその中から1枚選ぶ。そし

てそれについて自分の印象や思いを語り、参加者たちが順番に自分たちの思いを述べて行く。議論するわけではなく、淡々と思うところを語り合い、時には質問を挟むというだけだが、話を聞いてもらう、人の話を聞く、自分の言葉で語るという訓練が、ミーティングが終わってからも自省を促し、更生の準備を整える基盤となる。

このミーティングを見学させてもらったとき、「写真でなくてはだめなのか」と聞いてみた。すると誰もが「写真でなくてはだめだ」と答えた。写真だから現実に引



開放型刑務所



開放型刑務所出入り口



訓練作業所

き寄せて考えられるのだという。これが絵画だったりイラストだったりすると、好き嫌いが最初に出たり、その絵が良いか悪いかのような、本質的でないところに捕まってしまうのだという。

このプログラムで使われている写真だが、これはヴァルドレスという地方にある開放型刑務所の受刑者たちが作成したものだ。オリジナルの精神病院で使用されていたカードでは、自分たちの抱える問題に対応していないということで、企画を立て、地域の写真学校から機材を借りて撮影し、コンピューターを使って作品に仕上げ、1セットのカードという形に作り上げた。

その作業自体が職業訓練の一環にもなり、共同で作業するという訓練にもなる。完成したカードはそれ以降ずっと各地の刑務所で使用されている。

この話を聞き、ミーティングを見学させてもらって、自分もそのプロジェクトに参加したいと思った。新たなセットを作ろうという話もあるということで、それが現実化したら自分もやってみたいと思った。

そして今、大阪大学の教授が中心になって組織している元受刑者たちの集まりで、このカードを日本向けに作ってみようという企画が持ち上がった。自分も何枚か写真を提供してみた。自分には受刑や拘留の経験がないので、それがどれだけ彼らにとって意味あるものになっているかはわからない。だからこそ興味もある。

写真から刺激を受けて呼び覚まされる感情や思いというものが更生につながるという話は、写真の根源的な力を改めて感じさせてくれるものだった。それはいい、どこから来るのか、何なのか、考え続けている。

同時に、「撮られるというのはどういうことなのか」にも思いを巡らしているところだ。ミーティングを見学させてもらった刑務所では、写真印刷が職業訓練の一つになっていたのだが、その訓練に使用する素材が簡単には入手できないため、受刑者たちはお互いの肖像

像画を撮り合っているのだそうだ。

受刑者たちの多くは、家族関係に問題のあることが多いという。ノルウェーでも当たり前のように節目ごとに肖像写真を撮影し、親族や友人に送ったり、部屋に飾ったりしているのだが、大半の受刑者にはその体験がないという話だ。だから自分が一人できちんと撮影され、それがプリントされると、大喜びすると聞いた。

写真に収まるということはどういうことなのか、撮影されるということはどういう意味を持つものなのか。文化的にも異なる国で得た課題だが、写真の本質を突き詰めてみたいという動機になった。こうして考え続けている自分の写真がどう変わって行くのか、それもまた楽しみだ。



カードを使ったミーティング

「鶯」

東京写真専門学院を卒業して半世紀超。そして東京写真専門学校校友会役員をおおせつかってやはり半世紀超。そもそも齢70超！こんな原稿を書く事を想像もしていなかった。

振り返れば いや色々ありすぎて何処を振り返れば良いのか？

学校を卒業して初めて買ったカメラは銀色のトヨフィールドだった。

初めて買ったリンホフは中古のⅢ型 新宿コマ劇場の中の小さなカメラ屋だった！値札に二度と出ない美品！と店主がいいように書いてあった。

何も買わなくても旨いお茶を出してくれた。

麹町の貫井というカメラ修理屋さんも親切に色々教えてくれた。大塚三丁目には格安の印画紙が売っていた。規格外の印画紙で乾燥に苦労した。

そのうちに新宿西口に安い写真屋が出来、瞬く間に巨大になった。店の前を歩くと、つい店の音楽に乗せられた。佳き時代だった。



結婚した歳に8×10で2ヶ月10カ国以上取材に行った。

それから南米横断も取材した。計20カ国以上になる。

10年ほど前からデジタル化で極端に原稿料が安くなった。それが原因ではないが小脳出血で入院。

今は体の運動の為に子犬とデジカメで車上生活に出る。

撮影地で呑むコーヒーやアルコールは旨い！

先日ウチの奥様の同級生と新緑の上高地に行った。

運良く河童橋の先の眼前で鶯が鳴いていた。

いきなり撮影会になってしまった。皆60代以上。

あんなに真近で鶯の啼くのを初めて見た。楽しかった。

そのあと満月の甘利山に行った。

夜 木の根につまづき転倒！気をつけないと！

(この時の作品を裏表紙に掲載した。)

早すぎた写真業界の進展

校友会の終結とFOCUS最終号への寄稿をする時期が来たことを、月並みながらとても残念に思う。

校友会会長の宮本宏先生をはじめ、ボランティアとして多忙な中を関わっていただけた歴代役員、関係者の方々に心から感謝をするばかりです。

1967年、自己表現をレンズを通して主張したいと思い立った少年も齢71歳となり、今やある意味バッシングを受ける団塊の世代の構成員なのである。

5月1日からは年号も令和となり、戦後の高度経済成長時代と共に生きてきた昭和の臭いも最近では感じられなくなってきた。私は最後の「金の卵」世代なので夢もあれば希望も持っていた。今ほど無機質な息苦しい社会ではなく、そこには確かに人間がいた。

私は駿河台に移転した東京写真専門学院で2年間学び、学院の助手を1年、専任講師を2年間経験させてもらった。この間多くの学生と交流があり、今でも心配されたり心配したりと近況を語れる教え子がいること

をこの上もなく嬉しく思っている。

しかし、1857年に初めて日本人による写真撮影がなされてから162年。あまりにも写真という分野の進展が早すぎた。

私は確実に写る技術を習い、初めてカラー現像・カラープリントを体験し新しい写真の世界に夢を持ったことを記憶している。

日本は戦後の復興を、世界に類をみないスピードでやり遂げ、欧米に追いつけ追い越せの精神で一時は世界第2位の経済大国になった。その半面多くの分野で格差が生じた。

都市部における経済の成長と共に需要がつかない写真業界にも変革の荒波は意外と早くやってきた。国土交通省が工事写真のデジタル化実施を発表したのが2004年と記憶しているが、ここからバネ仕掛けの精密機械の時代に暗雲が立ちこめ、やがてIT産業の一角にのみ込まれていくことになる。

携帯電話に代表される子どもから高齢者まで写真を

撮ることに難しさがなくなったことには、多くの国民が歓迎したことだろうが、写真を生業にしていた人たちにとっては、大変な苦勞の時代に入った。機械（カメラおよび周辺機器）への投資が負担になり、多くの写真館、カメラ店が廃業の憂き目に遭ったことは記憶に新しい。

自分が写真に関わった半世紀を思い出してみたら、文明の進歩が必ずしも人類に幸せをもたらすとは限らないことを痛切に感じ、教え子の皆も元気で幸せであることを願い、あと少しの余生をゆったりと過ごしてみたいものと、暑苦しい今年の5月の空を眺めながら、パソコンに向かっている。

6800048 倉茂 義隆

東京写真専門学院時代

20歳の1968年、成り行きで上京して東京写真専門学院に通うことになった。

最初の課外授業で雨の日、日比谷公園に行き提出用の写真作品を写した。それは同じクラスメートのこうもり傘をさした寂しそうな後ろ姿、名前も記憶がなく言葉さえ交わしたこともなかった人。その日からどれほどの日数が過ぎたか。

覚えていないが秋頃だったような気がする。その名前さえ記憶にない彼が亡くなり葬儀の教会の会場にクラスメート数人で葬儀に立ち会ったのだった。その時、母親が故人の描いた絵画を披露してくれたが、孤独で、寂しく、暗い画調だったことをよく記憶している。彼はきっと以前から病を得ていて、もしかすると家族は命が短いことを知りながら、息子さんを東京写真専門学院に通わせていたのかもしれないと思った。私自身15歳で背骨を痛めて苦悩していたため、生前もし彼と話し合うことが出来ていたら心を通いあわせ、お互いを理解しあえていたのではないかと思ったが、その機会はもう永遠に失ってしまったことを悟るだけだった。今も度々あの後ろ姿の写真を思い出す。

そんな私が同じクラスの女性と親しくなり二人で同じ時間を過ごすことが多くなったが、結果的に彼女を傷つけてしまうことになり、悲しそうな彼女を見て見ないふりをして時間が過ぎた。そのことがいつも私の心の片隅に澱のように残り続けていたが、2016年思い

切って校友会に住所を調べて頂くことをお願いした。彼女の了解がないと教えることは出来ないということだったが、その後間もなく彼女から直接私に電話が届き、その声は明るくその明るい声に私は救われた思いがした。ただ凄惨な福島訛りで驚いたが、同時に過ぎ去った時間の長さを思わずにいらなかった。あれ以来メールで連絡を取り合っているが、さすがに健康についての話題が多くなっている。彼女の夫は腰が悪く、私も当時から腰のことで悩んでいたわけだから、彼女曰く「これが私の運命」と言って二人で笑った。

校友会の皆さんありがとうございます！



1969年2月11日 我が青春のほろ苦いひとコマ

6800406 富山 愛子

私は今年古希を迎えました。最近は庭で野菜や果物の成長を見ながら毎日を過ごしています。食べ物を作ることは、たいへん難しく農家の人は立派に思います。

カメラはデジタル化になってからあまり真剣に写真

を撮っていません。でも、写真が好きなので、今はデジタルカメラで撮り、昨年は写真集マダガスカルを出版しました。家では昔の6×7のポジフィルムを埃を取りながらスキャンしてDVDに出力して楽しんでいます。

親父の一言

親父の「大学を卒業したら、どうするんだ。写真をやるんだったら写真学校へ行ったらどうだ！」との一言が私の背中を押した。そして東京写真専門学院に入学したのは今からちょうど50年前のこと、1969年4月だった。その時には3年後の1972年2月には、日本で初開催となる札幌冬季五輪が決定していた。

大学では写真部に入り、山に、スキー場にと出かけてスキーの写真を撮ることが好きだった。東京写真専門学院に入学する直前には、札幌五輪を目指して強化に励む日本スキーチームのヨーロッパでのスキー W杯遠征と一緒に出かけた。もちろん札幌五輪を見据えてのことだった。学院を1971年3月に卒業し、そして1972年2月札幌で開催された五輪では「組織委員会公式カメラマン」として臨むことができた。

札幌五輪を機に、日本はスキーブームに沸くことになる。映画「私をスキーに連れてって」などもあってスキー場は賑わい、月刊誌、季刊誌、単行本など多くのスキー関連物が出版されていた。もちろんスキー産業も隆盛を極める。そんな流れに乗って学院卒業後も会社に勤めることなく、スキーを中心としたスポーツ写真を

生業にできたことは幸運だったと言わざるを得ない。

しかし2000年に入り、デジタル時代になると様相は一変していった。写真データに国境はなくなり、フォトエージェンシーが跋扈し、スマホやカメラを持てば誰でも写真家。「36枚撮り」という数字に支配されたフィルム時代とは打って変わってメディアカードの大きさ如何で撮り放題……。そんな変化に対応できる、できないに関わらず、時代は「平成」から「令和」へ。

そしてまた、2020年7月には日本では四度目の五輪、東京では二度目の夏季五輪が開催される。もちろん私も取材する予定だ。夏、冬合わせ18度目の五輪取材（冬季五輪13回、夏季五輪5回）になるが、その取材回数を生きがいとして、今から来るべき暑い東京の夏を楽しもうと思っている。



「卒業制作」冊子に掲載したもの。
カメラ：ハッセルブラッド500C/M レンズ：ディスタゴン50mm F4（左）、ゾナー150mm F4（右）

短くも遠い道程

写専を卒業して気が付けば五十余年。長い時間が経ってしまったが記憶に残るのは楽しいことばかりで、卒業がほんの少し前のような気がする。ただ二十代と古希を過ぎた今では気力体力とも大違いで、一つのことをするにも始動と完了までに大きな違いがある。とは言え培った経験と知識の裏打ちのお陰で、昔の勢いはなくとも着実な歩みは出来ていると自負している。

自分の人生を思い返すと幼稚園から大学までの学校生活でまともに卒業したのは小学校と高校で、その他は何らかのトラブルを起こして進路を変えてきた。写専も危うく卒業延期になりかけ、卒業後も幾つかの職業を転々とし、最も長く勤めたカメラメーカーも四十

代後半で飛び出し、気が付けばフリーの写真家として会社員時代より長い時間が過ぎた。

学校や職業を変ったのは自分の性格の所以だが、挫折や失望の先に出会った写真家の道は家族に「趣味を仕事にしている」といわれるほど身に合い、撮影や原稿を書く苦労は組織の対人関係より遥かに精神衛生にいい。

卒業から半世紀余を過ぎ、後数年で後期高齢者のレッテルを貼られる年になるが身に付いた知識や技術は生きている限り誰にも奪われることがない。今期で校友会や機関誌FOCUSが幕を閉じることにより一抹の寂しさはあるが、無理せず自分なりのカメラアイで被写体を見詰め続けたいと思っている。

私の写真史

私の写真史、四国から50年前、20歳の若者が意を決して、東京に写真の勉強に出て来ました。

西川口に友人とアパートを借り、毎日青い電車で御茶ノ水に通いました。

1年生の担任は中嶋先生、2年生担任日比野先生、僕にとってかけがえのない恩師です。今でもお二人とは、個人的に交流があり、とてもありがたい存在です。

1年生時代は学生運動が盛んで、学生の街、御茶ノ水駅界隈は独特の所でした。

2年生では、学校祭、運動会の実行委員長を担当、写真と共に学生生活、社会生活と沢山の経験をした短い2年間でした。

その後、研究生として1年間、引き続き専任講師を1年その後、広告写真ゼミナール非常勤講師と続きます。そのゼミは今も担当して45年間続いています。45年も経つと、学生も随分変わります、若い人と接する事は好きですね。

仕事の方では27歳で六本木の事務所をスタートに原宿、西麻布とバブル時代もあり、国内外の撮影に毎日多忙な生活を送り、当時有名なアートディレクター、デザイナーにも声を掛けていただき、国内外の多数の賞も頂きました。

これらすべて、私の写真史は東京写真専門学院からスタートでした。

今も大好きな写真を仕事に出来る事は恩師、友人、家族、など沢山の方々にサポートされ、続ける事が出来、大変感謝しています。

最後になりましたが、校友会が最後にスッキリしない状態で終わり、残念です。

これまで運営、継続、維持して頂いた歴代会長、スタッフの皆様、大変ご苦労さまでした、そしてお疲れ様でした。また、色々な情報や集まりの場を作って頂き、ありがとうございました。いつか何処かでお元気でお会いしたいと思います。

7000002 足立 寛

写真家の独り言

私が写真家として関わってきた写真業界の歴史を自身の足跡に沿って述べたいと思う。

私が意識し本格的に写真を撮りたいと思ったのは、約50年前1970年大学卒業後東京写真専門学院の門を叩いた時であった。

在籍期間中は、見るもの、触るもの、聞くもの初めてのことばかりで、写真というものは、ただシャッターを押せば良いと思っていたのがその間間違えて、奥の深いトンネルのような処に入ってしまったような感じを受けた。

2年生の夏休み明け担任から幾つかの就職先について声が掛った。その中から、写真家の河合肇氏に師事することになった。ファッション写真家として多くの雑誌の表紙や口絵などを撮影、その頃の言葉で“売れっ子カメラマン”と言われていた。スタジオには、女優、男優、著名人、モデルや編集者の出入りが多く、日々写真以外の事にも追われていた。

撮影は、ブローニーフィルム120タイプが4×5フィルムで“コダックエクタクローム（EP）”でE-3現像処

理法だった。その後処理法がE-6となり、フィルムはEP-Rに変わった。

日本国内に出回っているネガカラーフィルムを除きリバーサルフィルムは、35mmフィルムも含めて写真撮影用フィルムは、イーストマン・コダック社の製品が主流であった。増減感が効かないコダクロームⅡ／ASA感度25は、多くの写真家に使われ人気があった（2009年に製造打ち切り）。

その頃、後に脚光を浴びる富士写真フイルム社のフイルム製品は試作の段階であった。河合肇氏を含む第一線で活躍する多くの写真家のもとで試作品フィルムのテスト撮影をしていた。色調があまり良くなくコダックと違った発色であったことは記憶にある。

1990年3月、フジクローム・ベルビア、1994年2月フジクローム・プロビアが発売される。日本人の色彩感覚にあったためだけでなく世界各地で爆発的に売れた。それは、印刷業界でのカラーリバーサルフィルムのスキャナ取り込みの日常化による粒状性向上の必要があり、プロビアFシリーズのRDPⅢ、RHPⅢの特徴は「世界最高の粒状性」「抜群の減増感処理性」「色再現性

と調子再現性の向上」であったと言われている。

4年半ほどの修行を終え、1975年フリー写真家として巣立った。まだ出版界花盛りの頃であったため、月刊誌、週刊誌等々の仕事が入り固定化の感があった。広告写真も主に広告代理店からの依頼で新聞広告やチラシパンフレット等々の撮影があり、撮影料は、雑誌に比べ拘束時間等を割出しての単価は、高価であった。でも私は雑誌の感覚が好きであったため、撮影料だけの問題でなく依頼があれば内心嬉しかった。

フリーとなって何故か「俺は写真で苦労していないなあ」と考えた。それは、「海外に行きたい」と写真を始める前からの夢だった。親しいコピーライターとの話の中で、「お前は優しいからアクティブなNewYorkがいいぞ」「本物を見てこい」といわれて、NYへの願望が強かったので気持ちが固まった。1978年10月付き合っていた女性と結婚。すぐに渡米。仕事は、文化出版局からのNYコレクション（ファッションショー）を秋冬、春夏の3年間、日本の雑誌社からのNYのスナップ写真の依頼があった。写真家として世界の一流なものを見て撮ったということは、勉強になった。子供が生まれ、家族のために頑張ろうという気持ちが強くなり、人間として私を成長させてくれた。日本に帰国する目的でポートレートやスナップ写真の作品作りをはじめた。この時の写真は、2011年オリンパスギャラリー東京、大阪で個展を開いた。1982年4月に帰国。NYで撮影した作品を持って出版社を回った。渡米する以前と違う幅広いテーマや海外取材などの依頼が来るようになった。

1985年以降、出版社、広告代理店やメーカーの宣伝部や社長室、総務部、販促部から直接依頼もあった。その頃から、編集プロダクションやデザインプロダクションと言われる俗に言う下請け業者からの依頼が目立つようになった。出版社が編集ライターやデザイナーへ、ページ毎、テーマ毎の一括発注が多くなった頃で



アメリカ独立記念日(Independence Day) 1981年7月4日
「退役軍人クラブ」で婦人部勢揃い

もあった。

1980年代後半ごろから2005年頃まで、老舗デパートの事業部からの依頼で通信販売のカatalog撮影を手掛けるようになった。現在のインターネットのウェブサイトで行っている無店舗販売の先駆けであり、宅配便サービスの拡充があり、Catalog、チラシ、郵便物等を使つての販売であった。現在と違って写真家の立場は、撮影時のライティングや現像（主にモノクロ）は職人的な域でありシークレットな部分のある作業で、その価値観は高く評価されていた。

1970年代から2000年台前半まで、デジタルカメラが出現してくるまでの、カメラ雑誌の面白かった頃を思い出す。デジタル全盛期の現在のカメラ雑誌は、販売目的が違うから何とも言えないが、デジタル機器の技術的なことばかりで、写真評論や話題の写真や写真展について書かれている部分が少なくなっている。デジタルカメラの黎明期、我々は常にフィルムカメラとの比較を行いながら習得してきたが、次々とフィルムカメラの生産中止、撤退やフィルム未経験者の写真家が活躍するようになってきたからこそ、技術的な記事が多くなったのであろう。写真家として活躍する雑誌の減少による媒体の休刊、廃刊等があり場面が違って来たことも要因であろう。

写真家としてのコミュニケーションとインフォメーションを求め、1991年日本広告写真家協会（APA）、1993年日本写真家協会（JPS）に入会。APAは2005年に退会。JPSでは2007年より6期12年間理事を経験、現在も継続している。

業界団体に25年以上籍を置くことにより、写真家、写真関連会社等の情報や写真家としてだけでなく大人として知っておかなければならない事柄など、この歳になっても勉強になる日々を送っている。

数年後の写真業界、写真家については様々な事柄で不安視されている。デジタル、AIの開発と世の中が写真家にとって不利な状況になっていることは確かであろうが、老若男女問わず消極的にならず常に前進する事を考えるべきであると感じる。

私が写真界に身を置いた頃と違って、誰でも簡単に写真が撮れる時代になった現在、もう一度原点に戻って、“写真とは何か” “写真の記録性とは” “写真の歴史”等々の古臭いことを考えることも大切ではないだろうか。

私も写真家として最後の勉強を好きな写真を撮りながらおこなうことにしよう。

追憶の東京写真専門学院時代

写専に入学してから初めての実習授業で、担任の太田先生に「アマチュア時代が長かった分、自己流で写真をこなしてしまう。経験値をゼロにして、新たな撮影技術を習得するように」と訓話された。確かにあれも判ってる、これも憶えている、では新たな学習の成果が半減してしまうことになる。今で言う、メモリーの経験値データを初期化して、実習授業に取り組んだ。

帰宅すると、押入れの中で撮影済みフィルムを現像タンクに装填。水道のある台所で現像した。フィルム乾燥は自然乾燥だから、夕食を終わった後の時間から翌朝までの勝負だ。早朝に起床して、台所のフィルムをネガカバーに収納するのは辛い作業だった。

フィルム現像のない日は、二階の四畳半にしつらえた暗室でプリント作業に没頭した。引伸機はフジのS69だった。当初はフェロタイプがうまくかからずに苦戦したが、ドラム式の乾燥機を購入してからは、綺麗な光沢プリントが得られるようになった。担任のプリント評価も当初はBであったが、後期にはAが続くようになった。

私は入学時から卒業時まで、ずっと6×6判と4×5判を実習で使い続けた。35mm判カメラには指も触れなかった。そのためか、機動性を問われるスナップフォトや3:2のフレーミングで勝負するノートリフォトの実習点は散々なものであった。各種ブローニーフィルムを試写して、その現像行程を試行錯誤したこともあった。メインになるD76の1:1現像をマスターできたの

もこの時代だった。

写専の時代は、後に就職することになる雑誌社のアルバイトで実習材料費などを工面していた。自宅→写専→雑誌社→写専→自宅というようなタイムテーブルの毎日だった。休日もアルバイトや自習に費やした二年間だったが、到達する目標が明確だったため、充実した写専の生活だった。

校友会機関誌「FOCUS」が校友会の解散と共に終刊を迎える。30年来編集に携ってきた身にとって、発展的解消でない終了には一抹の寂しさを感じている。

終刊号には写専の実習で撮った作品？を寄稿することにした。一年時に購買部で購入した懐かしいネガカバーを手にとると、校章を白抜きしたブルーの帯色も褪せずに、しっかり保存されていた。

掲載作品の課題名は「我が故郷の新春」だった。カメラはマミヤC33で、レンズはマミヤ・セコール80mmF2.8を装填していた。撮影フィルムはコダック・プラスXで、現像データが「PXP D76 (1:1) 20℃ 8min 1/13」と鉛筆で几帳面に書き込まれている。撮影日は昭和46年1月1日だったが、1月13日に現像したことになる。

ロケ地は地元の「鉄砲洲稲荷神社」で、江戸時代から続く名刹だ。元旦の初詣の風情がモチーフであった。半世紀ぶりに取り出したネガをルーペで覗いてみた。フレームの中に老若男女の十数人の初詣参拝者が写っているが、その全てが和装なのに驚嘆した。昭和の時代の正月がここにあったのだ。



「東京写真専門学校」のオリジナルネガカバー

*「AERA dot. (電子版)」に連載しています。下記にアクセスして下さい。
<https://dot.asahi.com/aera/photoarticle/2019070500023.html>
<https://dot.asahi.com/aera/photoarticle/2019071900083.html>



和装の老若男女が新春の風情を盛り上げてくれた。
 鉄砲洲稲荷神社 1971.1.1

7000312 藤井 一広

早いもので卒業してから、約50年、歳を取るわけですねー。

学校に入ってから、すぐに合宿が有り、たまたまトライXの現像がうまくいき、モデルさんの良さもあり、最優秀賞を貰う事が出来、良い思い出です。

卒業し、学校から良い会社を紹介して頂き、印刷会社のカメラマンとして、勤める事が出来ました。日本各地の観光地、神社仏閣を撮影させて頂き、フリーに成る基礎を作る事が出来ました。

又、卒業して数年たった時、写真学校の同級生に誘われ、霧氷の会に参加しました。宮本宏先生を始め、他、多くの先輩、後輩など仲間を作る事が出来ました。最初の頃はマイナス10度位の外で、遅くまで飲んでいて、

今日は冷えるから、明日は良い霧氷が木々に付くと期待をしていました。

後に皆、大きなキャンピングカーになり、外で飲む事も無くなりました。



上高地に集合した霧氷の会

7100031 畑 博己

校友会と私の結婚と離婚

校友会創立50周年記念誌に文章を掲載していただいってからわずか4年足らずで校友会解散とは残念です。

写真学校を三年かけて卒業しました。三年目の時にお茶ノ水の写真学校近くにあるレモンという喫茶店で女性に会い、恋をして二年後に結婚しました。

39歳の時、上高地（霧氷の会）で、学校の後輩、先輩たちと会いました。その時、後輩の女性とめぐり逢いました。

現在は妻と離婚、その女性とも別れました。今、一人で寂しいです。

校友会総会に行く楽しみは、一人分の会費で三人分くらい、いやそれ以上に飲み食いして久しぶりに会った仲間との二次会が楽しくて。その校友会が無くなるとは……。

報道写真科のゼミで田中角栄の金脈などを明らかにしたルポライター児玉隆也さんと授業の後、君はどう

してカメラのストラップがタコ糸なんだと聞かれ、「自分とカメラとのかかわり合いです」と答えて粹がっていました（まだ口ばしの黄色いヒヨコ）。その後、トイレの壁の落書きについての話から始まり、公園・デパート・本屋、ジャズ喫茶の落書きは……しかし、築地がんセンターの入院病棟のトイレの落書きは他とは違うと。ルポルタージュの基本的な話しをしてもらいました。その児玉隆也さんは38歳でガンで亡くなりました。

最近の写真の仕事も少なくなり自分も69歳になりました。これから初心に帰り自分なりのルポルタージュ写真を撮る決心です。

ありがとうございました。

1970年入学、1973年卒業です。足立寛さんと同じクラスでした。担任の先生は宮本先生です。一年生を2回（落第で進級できず）三年かかって卒業しました。

オフィス仲亀

年金を受給しながらVTR撮影、編集DVD制作をメインに写真撮影・編集・アルバム制作等の仕事をしています。

高校卒業後品川区にある半七写真印刷会社に就職し夜間部の東京写真専門学校に入学しました。

会社では、カメラマン助手件営業マンと他の部門の写真製版応援、卒業後はそのままカメラマンとして1年半働き、家の都合で山梨に戻り富士宮市の会社に勤務しました。

趣味で写真を続け子供が生まれたのを機会にビデオカメラを購入して保育園・小学校・中学校行事等撮影していました。また14年後地元でできた会社に就職、QCサークルや新しく購入した機械の生産状況・作業マニュアル制作の撮影編集を会社より依頼があり、同時にサイドビジネスでビデオ撮影の仕事を始めました。富士市のビデオ制作会社にビデオカメラマン助手のアルバイトで撮影と編集を学びました。

勤務していた会社でもアルバイト公認でしたので、町の成人式のVTR撮影編集しVHSテープを成人者に記念品で渡す仕事が入りました。その後VHSからDVDに代わりましたが、安定した仕事になり現在も継続中で撮影しています。町と周辺町の入札参加資格も取り、道の駅「なんぶ」の映像制作の仕事もあり終わりました。

10年間勤務していた会社も早期退職制度に応募して退職し、住宅ローンも完済出来ました、富士宮市の会社に勤務しましたが、中国の工場に勤務の話が来たのを機に、サイドビジネスの仕事が同時に多忙になり、3年で辞め年金を受給しながら現在まで、サイドビジネスをして畑で野菜を作って、庭の手入れをして生活しています。

写真専門学校に学んだおかげでサイドビジネスにも恵まれ、納品した作品が喜ばれ、蓄えもできて良かったです。

最近では佐野章信の名前で検索するとユーチューブの動画が見られます。



卒業パーティー (1973.3.8)



左より安藤、仲亀、内園、西山、尾城、須藤



卒業パーティー (1973.3.8)

7100022 山田 典子

1972年に写真学校を卒業してから、もう46～47年が経とうとしています。

今では、娘2人 孫7人の、おばあちゃんになってしまいました。

高校時代、三次元の世界が何故二次元に表現できるのか？どうやって写真になるのか？と思ったことから写真に興味を持ちました。

入学初日、露出を測るメーターが解らなくて「これは何ですか？」と尋ねたら、助手の人達にどっと笑われてしまったことを思い出します。

当時は白黒現像で、潜像が浮かび上がってくるのが面白く感じました。

コンボラ写真など、その辺をカメラを持って歩き回っていました。「新宿で石を投げるとデザイナーの卵かカメラマンの卵に当たる。卵は卵でも、かえらない卵！」って、そういった時代だったのだと思います。

結婚してからは、何か写真に関する仕事がしたいと思いながら子育てをしていました。子育ても人生にお

いては大きな仕事だと思いつつ、子ども達が成長してから、京都で小さな写真屋さんを開きました。東京から友達が度々出張撮影で、お店に寄ってくれた時は嬉しかったです。

10年ほど続けたのですが、デジタル全盛期に入り写真屋を辞めることになりましたが、この年になっても依頼があればスナップ撮りに行っています。

最近では、西本願寺の聞法会館で写真コンテストがあり銅賞に入選。受賞式に出席し、厳かな雰囲気の中で賞状を頂きました。写真をやっていた良かったなーと感じました。

今から思えば、遠い東京の写真の学校に行かせてもらって親に感謝です。

今、若い人に言えることは、何でもいいので自分の好きなことを早く、見つけて進んでいってほしいと思います。

7110202 宮野 明義

入学許可書

入学試験を受けたのは、23歳の時である。

受験日の前日に高校時代の友人が「高校の時から付き合っている彼女に話を付けに来た」と秋田から上京してきた。結論は「別れた」となり、秋田へ帰るという。友人を上野駅まで見送りに行き、汽車の出発時間まで一杯やることになった。一杯が二杯になり、出発時間は過ぎ、とうとう朝まで飲むことになってしまった。

酒に酔った状態で入学試験を受ける。

作文の題は「現在のファッションについて述べよ」であった。「ファッションなどどうでも良い、寒く無ければそれでよい、今は写真を基本から学びたい」と書く。

どうも、間違ってデザイン学校の方を受けていたようだった。

最後の面接で「友人と朝まで酒を飲んでいました」と謝り、「自分が不合格になれば、日本の写真界は駄目になる」と酒の勢いで言ってしまった。

その結果、もらった入学許可書である。

昼は現像所の社員として働き、夜は睡魔と闘いながら学校へ、そして昭和48年3月に報道写真科を卒業した。

その後「日本の写真界」はなにもかわらなかった。



写真に感謝

私は小学校5、6年の頃、撮影する愉しさに目覚め中学の写真部では微かなオレンジの光に照らされ現像液の中で浮かび上がる画像を覗て何故か深く感動したのを覚えています。

その後、高卒で東京写真専門学校に進み2年生の夏休み、住み込みで車のスタジオ撮影のライトマン助手を経験しました。

初めての照明の仕事はデキの悪い自分にとって訳が分からずパニックってチーフからは怒鳴られっぱなしでしたが、その関係で卒業後、車の広告を制作をしている広告代理店から声が掛かり助手を経て徐々に撮影を任されるようになりました。

その後、LAのスタジオからの誘いで渡米するのですが、数年後に突然グリーンカード（永住権）で擦った揉んだがあり、仕方なく帰国することになりました。

いま考えるとその時、日本は経済成長の真っ直中で広告業界は右肩上がり古巣の広告会社も築地に自社ビルを構え、そこからの撮影の依頼も日に日に増え写真時代の仲間とスタジオ兼事務所を構えました。

その時代の恩恵を受けたことは言うまでもありませんが、その後のバブル崩壊、リーマンショック、デジタル化、老年期などのボディブローに耐えられず事務所のパートナーも1人去り2人去り。そうして今年になり設立して40数年の幕を閉じることとなりました。

ちょっと寂しい感じは否めませんが、思い起こすと卒業後もお茶の水校舎で個展をしたり、非常勤講師、FOCUS誌の表紙写真や「卒業生50人による写真展」にも参加させて頂きました。

まだ終わった訳ではありませんが、これまでフォロー頂き充実した写真家人生を送ることが出来ました。ありがとうございました。



私から作品展の案内状をお送りする度、必ずと言っていいほどマメに足を運んでくださる日比野先生、その感謝の気持ちと言う訳ではありませんが、先生7人で結成したおやじ倶楽部写真展「七人の眼」には毎回、お邪魔してパワーを頂戴しています。
写真は新宿フォトギャラリー「シリウス」にて先生方のオープニング挨拶と日比野先生と素敵な奥様とのツーショット。



写真の美男美女は、NY在中のメジャーを野茂選手の時代から長年撮影しているカメラマン菅氏と奥様（画面の右2人）の帰国時に同級の仲間が事務所に集まりました。みな同級生で60後半のはずがシャッターを押す一瞬だけは二十歳の頃の笑顔にタイムスリップです。（2017年12月）



今年6月には同級の友人と宮本先生の新緑上高地に同行させて頂きました。大自然を相手に最高の一瞬を捉える為の心構えは我らコマーシャル畑で育った軟弱カメラマンとの違いをまざまざと見せつけられてしまいました。この場を借りて感謝です。これからも健康に留意しスーパースhotsを撮り続けて下さい。写真は上高地にて宮本先生と相棒チョコちゃんとのツーショット。

課題制作で学んだもの

2学年への進級制作「感覚表現」が思い出されます。先生の出題説明は、透明感・重量感・動感・寂寥感・光輝感の5つを表現せよ。人物や風景、社会現象など被写体は自由……というものでした。とかく私の写真は、それがどうした何を言いたいのかと観察眼の甘さを指摘されましたから、対象に内在するものを探り本質をあぶり出そうとするこの課題は、刮目すべき点がありました。

投げ掛けられたテーマを受けて何をモチーフに、どんな切り口で映像化するか。迷ったあげく、孟宗竹の生い茂る竹林で取り組むことにしたのです。そこには、間隙を縫って降り注ぐ陽光を受けて、天に向かって一直線に競い合う勇壮な空間がありました。竹たちのお喋りのような葉音と土の匂いに包まれて、誕生と成長と腐朽を繰り返す姿に、表現しようとする要素が展開しているように思えたのです。

写真は、各々に対応した5枚組の一部です。

当時のカメラには、自動焦点も連写機能もありません。目的の作画に適した焦点距離の単体レンズを選び、絞りとシャッター速度を決め、慎重にピントを合せてシャッターを切る。あとに続く薬品臭漂う暗室での、期待と不安が入り混じるフィルム現像とプリント作業。容易に納得のいく1枚を作るはずもなく、撮り直しの連続でした。先生の批評は厳しいものでしたが、進級時に優等賞を頂いたことがうれしい励みになりました。

あれから半世紀。竹林は、瀟洒なたたずまいを見せる住宅地に変わりました。遊具の整備された広場から子供たちの歓声が聞こえます。昔日の面影はどこにもありませんが、課題に没頭してつかみ取ったものが心に残ります。

作品づくりの思考法を授けて下さった神田駿河台校舎当時の先生方、校友会の運営とFOCUSの発行で交流の場を提供されました役員の皆様、ありがとうございました。



感覚表現「透明感」



感覚表現「重量感」



感覚表現「寂寥感」

学校創立以来50年近く続いた校友会がカウントダウンとの風の噂。校友会がなくなると学校との接点がますます薄れる感じがして寂しいです。

私にとって写専で学んだ2年間は今も大きな心の財産となっております。

先生方は情熱を持ってご指導くださり、その後の仕事や家庭生活にも役立っています。

東京ビジュアルアーツがこれからますます若者で溢れ、豊かな人生を歩める場となりますよう願っています。

写専本当に楽しかった!! 感謝

7100010 黒澤 富雄

写真学校では、授業とアルバイトの繰り返しで、課題に追われての日々でした。

夏場は下宿の押し入れで、夜に現像と引き伸ばしをしていました。現像液などの液温が上昇してプリントが大変だったことを思い出します。また、大量の水を流しながら水洗いしていて大家に白い目で見られていたのも思い出します。

学校時代、在学中の知合いは、数人いましたが時が経つとともにだんだん交流が無くなりました。

後にキヤノンサロンで「花火・光のシンフォニー」発表の折、校友会副会長の諸河久先輩と知り合いになり、校友会の活動を知る事となります。思えばすごく有り難く感じており、この場をお借りしてありがとうございます。ございましたと感謝申し上げたいと思います。

花火写真の後、久慈川の表面に無数の氷片「シガ」



が流れるのを18年間撮り続けました。だんだん温暖化になり流れる機会が少なくなり完成までには年数がかかりましたが、写真展を行うことが出来ました。会場のリコーにフジテレビが取材に来て、インタビュー形式で全国放送され写真集も出ました。

今は、東日本大震災の後の様子を見ながら出かけ撮影を続けています。

また、地元では日本最古「西塩子の回り舞台」が復元されていて、地鎮祭から講演会の後の解体までを撮影しています。真竹を切り出して10m～15m組み立て、縄で結び作る地元の住民の手作りの舞台です。組み立て期間は3カ月かかり毎日通い続けての撮影でした。

校友会のスタッフの方々、大変長い間お疲れ様でした。今後も健康でご活躍を祈ります。



7100025 児玉 成一

今、振り返ると49年も前に東京写専へ入学した事に、時が過ぎ行く事の早さに驚かされました。

父に入学を反対されていたため母から入学金を、その後に学費を得てフィルム、印画紙を購入するためには日々アルバイトをせざるを得ませんでした。

夕方から朝まで、首都高速料金所での料金徴収です。学費を支払いながらニコンF+ニッコール24mmを購入し新宿淀橋カメラでTRI-X100フィートを購入しパトローネに詰め様々なところへ出掛けていました。

卒業制作の時期、テーマを当時社会で大きな話題になっていた三島由紀夫の割腹事件を扱おうと取りかかりました。夜、小学校を借りて数人の友人たちにモデルになってもらいロケを敢行！

担任の日比野先生に提出しましたが…駄目でした…再提出。力不足を認識せざるを得ず、打ちのめされました。日比野先生から『お前が今まで撮って来た風景

をやれ！』。

再提出のため日本海をテーマと決め夜行列車に揺られ富山、福井、石川、秋田、青森へと海岸線を撮って歩きました。

日比野先生からその再提出の仕上がりを褒められた事を忘れることができません。

今日また仕事として仏教教団からの依頼で風景写真を撮る日々が多くなりました。

はからずも今、風景写真を撮るために各地を巡る事が多い現状ですが、特に地方の町でかつて日本海を卒業制作のために歩いた事とデジャヴのようにシンクロする不思議な思いを持ちながら、様々な感謝の思いとともにカメラを構えています。

FOCUS誌の発行は最後となるとの事ですが、私の心の中には卒業制作の記憶がいつまでも大切な想いとして残っています。

1枚の葉書と校友会

54年の歴史をもって校友会は今期で幕引きとなり、このFOCUSも最終号となりました。その間、会員のみな様のご協力を得て会計監査役を約20年間務めることができましたことを、ここに御礼申し上げます。

思い起こせば、東京写真専門学院二部報道写真科を1974年に卒業して間もなく、中嶋先生と日比野先生の連名で校友会の幹事推薦とあわせて幹事打ち合わせに出席の要請が葉書で届きました。

何も知らず突然のことでしたが、よくわからないまま先生方の推薦ならば仕方ない、と葉書にある通りお茶の水の校舎に向かい、校友会の打ち合わせに出席しました。しかし、打ち合わせには知った顔もなく、議

題の経緯説明があったわけでもなく、内容がよくわからないままでした。これでは続きそうにもないので、推薦いただいた先生方の手前、数年我慢したら辞めようと思ってました。

というのは、当時の職場は東京の外れの下丸子で、16時45分の終業に合わせて退社して、急ぎお茶の水での打ち合わせに出席する状態でした。フルタイムの仕事は新製品の着手で多忙を極め、二部に通学している時は職場の理解もありましたが、校友会の打ち合わせでは理解を得づらく、残業調整に苦労したからです。

数年後、職場が新宿に移り学校にも近くなり、校友会幹事達の気心も知れ、これなら続けて行けるかなと思い始め、結果45年も校友会にかかわってしまいま

7210003 岩渕 幸浩

昭和47年入学して49年迄の東京写真専門学院生としての2年間は、私にとって素晴らしい時間を過ごす事が出来てうれしく思いました。

小見山秀雄先生にはたいへんお世話になり、卒業後にも学校のスタジオを個人的に借りる事が3回ほどあり、Bスタジオで記念写真を撮りました。左から梶山智氏、河野哲夫氏、森脇（旧姓・堀）せつ子氏、そして

私の後輩・高山茂氏です。

銀座では、日本橋通りが日曜日には歩行者天国になり、クラスメートの阿部喜代志氏（左）と自分の写真を森脇せつ子氏に撮影をしてもらいました。

今年で卒業後（1974年）45年になります。

校友会も終結になりますが、同窓会として続けてもらえたらと思います。



▲銀座歩行者天国にて
◆Bスタジオで記念写真

した。

そして、気付いたらある時から会計監査役になり、20年程も務めたのかな……。

ともあれ、在任中は筆舌に尽くし難いアレコレの事項を役員一丸となって乗り切ったこと等で、年々団結力が培われて行くのを実感して行きました。

振り返れば紆余曲折もありましたが、何といても2015年の「校友会創立50周年記念」のイベントでした。写真展とパーティ、そして記念誌発行は校友会の集大成となり、在学中の思い出と共に大切なものとなりました。

何ひとつ取っても貴重な経験を積み重ねました。

卒業して45年。今は重たい一眼レフは避けてタブ

レット撮影がメインになりました。プリントせずにメール添付で済ませる時代にあやかってます。でも「ここぞ!」の時には、やはりカメラに登場してもらいます。この10年前からカンツォーネ（イタリア民謡）を習い始めました。それまではステージは撮影するものでしたが、今は撮影される側。いかに写真映えするかを赤やオレンジ、黒や青など歌詞の内容と合わせて選び、色バランスを考え、アクセサリーの輝きも取り入れてステージ衣装を決めています。

まさか、撮る側が撮られる側に入れ変わってしまうとは。時の流れのいたずらでしょうか。

7210226 高橋 孝二

1972年僕は、伊勢丹写真室に勤めながら東京写真専門学校（二部商業写真専攻）に通っていました。

在学中、新宿ステーションビルで気の合う学友と4人展を開催したことは、今でも大きな思い出の一つです。

小林ゼミではポートレート、ヌード、ファッション等スタジオライティングを学びました。また小林スタジオでのクリスマスパーティーで盛り上がり、学院のギャラリーでの写真展、写真集の発行等楽しい思い出が沢山あります。

担任の千房先生の指導のお陰で写真表現の幅が広がり卒業制作に繋がりました。銀座富士フォトサロンに友人の岩渕さんも一緒に作品が展示された事は非常に光栄に思っています。千房先生、学友の岩渕さんとは今も付き合いがあります。

東京写真専門学院の2年間は、70を過ぎた今も写真を生甲斐としている僕に大きな影響を与えてくれます。



クリスマスパーティーにて



新宿ステーションビルにて



富士フォトサロンの卒業制作展

時代

吉田拓郎の「赤い風船」などが全盛の1970年代に東京写真専門学院に在籍した。

授業内容は講義、スタジオ撮影実習、暗室・etc～。この・etcの引き出しがいっぱいあった。

その引き出しの一つが「風景写真ゼミ」で、ゼミ担当の川口政雄先生が主催する「霧氷の会」に参加した。霧氷の会は11月文化の日に上高地で霧氷を撮影する会。各自、好きな時間に参加する自由な集まりで、活躍している写真家も参加する楽しい会でもあった。

その「霧氷の会」で知り合ったのが、藤井さん、畑

さん。今では写真とは程遠い話に盛り上がる。錦糸町近辺の居酒屋メイトで、3名とも、会員番号が近いJPS会員でもある。

「霧氷の会」では様々な事を教わった。霧氷の美しさ、車中泊の楽しさ、蔵王でのスキー。何とアーチェリーまで。教わったセンセは校友会・現会長の宮本先生だった。先生にはJPS入会の保証人を川口政雄先生と共に快諾していただいた。これも東京写真専門学院に在籍したおかげだと思う。

今年で機関紙FOCUSと校友会が千秋楽となるという。そんな時代も～。

7300176 鈴木 鍵一

60代中半になりました。この春には初孫が誕生して初爺です。未だ現役で仕事をしています。

写専を卒業してから小さな通信社に勤めることになりましたが初めての社会人としての自覚が足りなかったのか三か月程で退職しました。

一から出直しとして、貸しスタジオに勤務しました。スタジオに来られる方たちは勿論プロの方達で、自分の考えの甘さにウンザリでした。

スタジオの先輩たちに助けられ色々な事を教えてもらいました。給料は以前勤めていた時とは雲泥の差でしたが充実した時代でした。

二年近く勤め、次は個人事務所にアシスタントでお世話になりました。

当時は男性誌全盛の頃でセミヌード、ヌード撮影が中心で忙しい時などは一日に三度も撮影があり何処に視線を置いて良いものやら気恥ずかしさがありました。慣れとは怖いもので半裸のモデルさんが目の前に立たれても何時の間にか動揺も無くなっていました。

その時の反動かヌードは今日まで撮ったことも無し撮る気も起きずです。

その後、以前から知っていた制作会社の処でフリーとしての仕事が出来ようになりました。最初の仕事の時にはアシスタントには任せずに自身でフィルムを装填しましたが、緊張で震えてしまい逃げ出したい気

分でした。

こだわりを持っている会社でストロボを当てる距離での質感、フィルターでのボケ効果など納得行くまでやる、フィルム一枚にはケチるのに超過したスタジオ料金には太っ腹で大変有難い会社でした。

その後、週刊誌の仕事を貰えるようになりました。

最初はCMと二足のわらじでやっていましたが、水が合ったのかいつの間にか週刊誌一本だけになりました。

一人でやっていたCM時代とは違い、大勢のカメラマンに囲まれて圧倒されっぱなしでした。

週刊誌のカメラマンは何でも出来なければいけないよと、先輩カメラマンに教えを受け、出来る仕事は何でもやりました。

先輩カメラマン、他社のカメラマンに仕事を教わりながら三十数年今日までやって来ることが出来ました。

現在は芸能、皇室を中心としてやらせてもらっています。

何時の時も教わりっぱなしですが今日あるのは友人、知人、同僚に心温まるサポートを受け助けてもらってきた結果ではないかと思います。

健康であることを大切にして、まだまだ現役を続けて行きたいと思っています。

一枚のプリント

最近、古い写真を整理していて学生時代の一枚の写真が見つかる。4×5のコンタクトプリントだ。ネガもどこかにあるかもしれないがそれはまだ見つからない。

上野の西郷像の前でクラスの仲間と写したのだろう一枚、多分授業の中で屋外撮影実習だったであろう、4×5のカメラを持ち出して、その頃だからカメラについていた標準150ミリレンズだろうか、大きなカメラバックと三脚を持ち出しての一枚だった事が想像できる。ピントは西郷像に合い、シャッターを押す自身や並んだ人物はボケてしまっている。失敗写真だ。

5人で写る中の二人は今でも名前が認識できる、残る二人は、そういえばと顔を認識して思い出す事はできるが、今では名前までは分からなくなってしまった。すでに数十年の時を経てお付き合いが無くなってしまっている。多分、同じクラスの仲間だろうかと思像するしかない。

若かりし頃の自身と、知り合いの二人、内一人はつい先日亡くなってしまった。ずっとカメラマンとして東京の雑誌社で活躍しながら心臓病を患い、実家の北海道に戻って療養中、すぐのことだった。東京の病院を退院し故郷に戻るといふその日、病室で会ったのが最後になった。

とうの彼、学生時代、失恋のせいだったか学校生活を放りだして北海道に戻ってしまった事が有った。その時、仲間がこぞって呼び戻した経緯が有る事を思い出す。失恋のせいなどという仲間からそれは違うと咎められそうで、詳細は記憶の縁に分らなくなってしまったが、その頃、仲間はR60グループという集団を作り、流行りのR60、赤外線フィルム用の赤いフィルターを付けて、トライXを増感、高感度の粒子の荒れた写真を撮っては粋がっていた。懐かしい思い出もある。5～6名いた仲間のうちすでに2名は天国に旅立ったが、残る数名とは今だに長い友人として、お付き合いをいただいている。

当時、成田ゼミというゼミ授業もあり、卒業生の成田秀彦先生が担当されていた。そんな仲間と四谷三丁

目の先生の事務所に出入りしていたことも思い出される。学校を辞められた後も成田先生とは今だにお付き合いがある、そのほか先日行われた「7人の眼展」の写真科の先生方とも同様に付き合いが続いている、当時の先生と生徒という関係から長年のお付き合いままで、時を経てつながってゆくというのは、「写専」だからこそなのかとも思う。

同じ職業を目指したという事からなのか分からないが、当時の他の仲間とも細々とだが縁をつないでいる。

私自身はなぜか校友会の仕事に関わり40年ほどを過ごしてきた。思えば長い年月である。校友会に関しては様々な思い出や出来事も思い出すが、FOCUS最終号ということで、ここにきて皆さんから集まってきた様々な原稿を目にしてみると、我々にとって東京写真専門学院、学校、ビジュアルアーツ卒というのは単に出身学校としてだけでは無く、今となっては大切な青春時代の二年間を過ごした貴重な時間の記憶として、青春そのものの象徴だった事が良くわかる。

私にとっても、当時の友人とのつながりが今だに続いている事に感謝の言葉しかない。そして私にとっての校友会もそういった意味で、続けてきて良かった。の一言だろう。終焉はたいへん残念ではあるが、これで一区切りの感もありホッとした思いも複雑な思いの中にある。

校友会！ありがとう。



4×5の校外実習

7300012 稲葉 由美子 (旧姓：安斉)

卒業から、44年の歳月が流れ、時々上京した時、総武線でお茶ノ水を通るたび、車窓から見上げた校舎も面影が無く、それでも、毎年届く校友会機関紙「FOCUS」で担任だった中田先生、坂口先生、そして同級生の名前を見つけるとあの頃の記憶がよみがえり、課題を撮影するために4×5をかかえて校外学習に出かけた事を、なつかしく思い出していました。

私にとって写真は趣味で楽しんでいた父が、脱サラで写真屋を開業したことで生活の一部となり、当然のように選んだ進路先が「東京写真専門学院」でした。卒業後は家業の写真屋を手伝っていましたが、嫁いだ先が写真とは無縁の職業だったため、培った写真技術は、わが子の成長記録に活かされました。デジタル時代になり、写真は技術が無くても無難に撮れるように

なり、すっかり素人になってしまいましたが、8年前、東日本大震災のボランティアに行き、津波で被災して泥だらけになったアルバムの洗浄作業をして、「写真の使命は記録する事にある」と、有名な写真家の方が言っていた事を思い出しました。そしてあらためて一枚の写真に込められた一人ひとりの思いや、写された家族の歴史を語る写真の偉大さを実感しました。現在もまだ続けている、被災写真洗浄ボランティア活動を、私のライフワークにしています。

校友会という形はなくなっても、卒業生一人ひとりの心の印画紙に焼き付けた写真での思いでは、いつまでも消えることはないと思っています。長い間、有難うございました。

7310181 吉村 真里

私にとっての校友会とは

初めて幹事の一員として会合に出席したのは1975年と思います。それからまもなくして会長の米本さんから会計係を頼まれました。

前任者からの引き継ぎは一年位後に「雑損」「残金」「0円」のメモの様な物でした。仕方なくFOCUS発行に必要な金銭工面のために企業、会社、現像所、スタジオ等を自費で賛助金のお願いに回りました。当時は会費の集め方等、いろいろ努力していました。

長い期間私が役員を続けられたのは、川口政雄先生から「大変な事だから遣り甲斐がある、人がいない分頑張りなさい。米本さんの手助けをして良い会にしない

さい。」の言葉でした。

会長米本さんの情熱にも引っぱられ昭和から平成へ。米本さんから坂口さんへと引き継がれ、宮本さんにバトンが渡された時「陰で協力します。少し休みます」と重い荷物を下ろしました。

40年余り大変でしたが多くの人に出会え、ご協力を頂き、その後も今日まで校友会、FOCUSが続けられたのは大変な努力、ご理解、ご協力の賜物です。

今後はFacebookに交流の場が移るようです。新しい卒業生、校友会のメンバー等が活用していくことを期待して、次世代にバトンタッチしたいと思います。



昨年の総会にて 右端が筆者

7310163 土生 昭一

私は、昭和34年フジペットカメラを手にした時はブローニーフィルムでした。昭和38年初めて35ミリカラーフィルムで写した写真が、当時手札サイズで一枚100円でした。焼いた思い出であります。当時は店（写真）に行っても白黒フィルム（35ミリ・ブローニー）を現像してくれました。

今は写真の世界も、デジタル化が進み私の家の近くにあった店（写真）もなくなり、けっこう離れた所に行くしかなく、店員さんにブローニーのネガで「キャビネに焼いてください」と言った所、店員さんから「それは何ですか?」と言われ、時の流れを感じました。

学校の授業で受けた、カラー、モノクロフィルムの現像と紙焼き等、仕事で生かす事が出来ました。

学校の卒業写真は「都電」をテーマにして写しました。



日本橋

あらためて見ると、昭和39年のオリンピックに向けて盛んに、高速道路が出来て、便利になったが、今度は風景が良くないとかで取り壊す、またコースを変えるとかで話しが出ている。

もう一枚の写真は何十回となく交通博物館に通った万世橋交差点です。今では知っている人は少なくなったと思いますが、都電の信号塔があった、その時の風景を感じる所です。

青春時代に撮りためていたフィルムを、学校で覚えたことで、今でも時間があれば現像（紙焼き）して楽しんでいます。

私の周りからまた一つ消える淋しさを感じる所です。

（ご苦労さまでした、有難うございました。）



万世橋交差点

7400229 中村 貞行

写真学校に入学したときは写真の何を学ぶのか、自分でもはっきりしていませんでした。ただ写真を綺麗に撮りたいぐらいだったと思います。モノクロのフィルムを現像する授業では温度管理・時間・薬品、終いにはフィルムの種類で作品の仕上げ方が違うことを知り、表現により色々と組み合わせないと思った様に仕上がらないんだと初めて知りました。

それよりも先に、レンズの焦点距離での特性・シャッター速度・絞りの深度。何を撮るかで全部決まります。まあ当たり前のことですけどそれが勉強なんですね。最近ではデジタルと言う時代で、基本であったフィルムを使わず写真が撮れます。露出もピントもシャッターチャンスなど秒10コマ。ですが、写真の基本はやはり何を撮りたいかですのでカメラは表現するための道具ですから。それをいかに操るかでしょうか、そして又

新しい表現方法が増えたわけですから作者の表現幅が増えたんですね。

入学当時の現像すらまともにできなかった写真がありましたので同封いたします。歴史の中にいるんですね。

たまに昔を思い出すのもいいものです。



探し当てた双子のソンとチュン

偕成社創立80周年記念事業の一環として「世界のともだち」全36巻が刊行される運びとなった。36人の写真家がいっせいにかの地に飛び、12巻ずつ3年で完結するというものだ。

以前出版していた拙著「メコン街道」(水曜社)や「メコン 源流をもとめて」(福音館書店)を参考に私のところにも編集者が訪れ、ベトナムを担当してほしいといわれた。詳細を聞くと10歳前後の子どもに焦点を当て、学校や放課後の過ごし方、お手伝いなどその一日を記録し、なおかつ四季を通して撮影するというものだった。

私は雑誌の連載や写真集をつくるためインドシナ、とりわけベトナムにはあししげく通っていた。そんなベトナムは周知のごとく雨季と乾季しかない。だが子どもを中心とした祭りがあるのでそれを取り上げ、四季の変化に対応してはどうかと提案し了解された。しかも10年前にある家庭にお邪魔して撮った、生まれたばかりの双子の赤ちゃんがいたので、その写真を見せると編集者はいたく気に入って、彼らを中心に撮影することになった。

ところが場所がうろ覚えだったため、当時案内していただいたガイドを尋ねると退職し、今どこにいるかわからないというではないか。自力で探すしかない。ボートで訪ねたことや、この地域最大の水上マーケットに近かったことを頼りに、プリントアウトした写真を持ってバイクタクシーで見当を付けて探し始めた。まわりも変化しているだろうし難しいとは思いながらも、双子はそれほど多くないと思い、意外と簡単に探し当てられるのではという淡い期待もあった。しかし、いざ現地に行ってみると私にはどこも似たような風景にしか見えず、あっちへ行ったりこっちへ来たりと探し歩いていると、ますます混沌としてくるのだった。それに加え雨季だったため朝のうちは晴れていた青空も急激に暗くなり、バケツをひっくり返したようなスコー

ルに見舞われた。途方に暮れていると、いわれるまま動いていたバイクタクシーのドライバーが、積極的に周りの人たちに聞き始めた。そして探しはじめてどれほどたつたろう、偶然にも立ち寄ったタバコ屋の主人が、家の特徴に見覚えがあるといい案内してもらった。するとカーブを曲がったと思いきや、10年前訪れた家庭が忽然と目の前に現れた。しかも写真に写っている家族と、大きくなった双子の子どもたちが、あたかも私を待っていたかのように、迎え入れてくれるではないか。

ここはメコンデルタ中心の街カントーからバイクタクシーでおよそ2時間の距離だった。しかし、同じところを堂々巡りし、8時間もかかったのである。だからこそ子どもたち、そしてご家族に再会できた喜びようは格別だった。私は彼らを探し当てたことで、今回の撮影取材の成功を疑わなかった。



ソンとチュン

世界の女性を救済する女神

私は単なるロック・バンドの追っかけで、いわゆる「腰かけカメラマン」だった。しかしながら、在学中から音楽雑誌のカメラマンとして頭角を現して、その後「女性自身」「フォーカス」「フライデー」の各誌では数々のスクープ取材・撮影の業務に従事した。

一方、時事通信社「週刊時事」や日本経済新聞社「日経スタッフ」のカメラマンとしても国内外のVIPの撮影も担当したキャリアを持つ。

世界30ヵ国以上を取材・撮影して、国家元首や各国の政府高官との面会も多数、経験している。現在では、駐日している各国の大使クラスとは幅広く交遊している。

今までのビジネス並びにプライベートの経験を活かして、将来は「女性の社会への進出」と「女性の社会的地位の向上」のために世界レベルでの活動をしたいと考えている。

こうした「未来計画」の中で、私は本来の「夢」であっ

た女優・モデル・シンガーなど芸能（ショービジネス）への進出を検討中！私の前半生が、「事実小説より奇なり」で本当に小説や映画になる話なのだ。

高校を卒業する時には、まさか私の前半生がこんなに波乱万丈で苦しく「地獄」のような体験をするとは想像もしていなかった。今までの困難をバネにして「災い転じて福を成す」と言う後半生を送りたいと考えている。

そして「継続は力なり」だと思う！私は「永遠のロック少女」として、ずっと「ロック魂」を持ち続けている。自分の人生に負けないで、「女性差別」と「学歴差別」に闘い続けて國學院大學と中央大学で法律も勉強して勝利した私は、自分で自分を誇らしいと思う！

自分の前半生を振り返り、人間は国籍・人種・宗教、そして男女の差別なく生きるべきだと考えている。

公式サイト <http://www.reikonoe.tokyo>



8200725 高内 純平

私は大学を卒業してから東京写真専門学校に入学しました。今は東京ビジュアルアーツと言われていますが、クラスは報道写真科です。そこで、報道写真を学びました。

高校を卒業したばかりの年下の同級生が多く、えらそうに、しゃべっていたかもしれません。でも面白かったです。あの頃は、カメラはフィルムカメラしかなく、白黒ネオパンSSを使用して毎日、写真を撮っていました。

映像撮影技術も時代とともに変わり、フィルムから

テープ。それから、ディスク。撮影道具や技術は変わっても、還暦になった今も、その生活は変わりません。仕事とは、その人の考え方や決断により決まっていきます。日本人は、よく仕事は何をされてますか？と聞いてきますが、何を仕事としているかではなく、人生において自分は何をしているかだ。とフランス人は聞くのです。考えてみれば、よく生きて、こられたなと思います。でも、誰もが通る道だともいえます。そしてまだ、続きそう。夢を追う日々が。



三宅島合宿での水中写真講習（1982年7月）

東京写真専門学校を振り返って

この度、『FOCUS』最終号との知らせで、寄稿のご依頼をいただいたことに、感謝申し上げます。

現在も現役で、写真の仕事に従事できているのも、師匠・根本タケシ氏に会えたのも、この学校に入学し、卒業したからこそ！と感謝しています。

平成元年に東京写真専門学校に入学した私。今や、令和になってしまいました。カメラマンになりたいと、高校生の時に、2回ほど入学体験講座に参加し、東京工芸大に行くか、迷った結果、国内で一番の専門学校と聞いて、東京写真専門学校に決めたことを思い出します。

写真を志したものの、何もわからない私は、毎日新鮮で、ドキドキの連続でした。当時、一番町の校舎ができる前で、デザインの専門学校と一緒にあったと記憶しています。スタジオの数、暗室設備、どれをとっても新しく、入学者数が千人近くのマンモス校。十数クラスあったと思います。そして、殆どが男性。ひとクラス50人中、女子は5人程度でしたが、3ヶ月もすると、女子は2～3人になってしまいました。現在、他の写真学校で講師を務める私のクラスは、25人中20人が女子です。ずいぶん変わりました。

実家から通う私と対照的に、殆どの友人たちは、地方から出てきた方々ばかりでした。皆さん裕福な家庭の人たちが多かったように記憶しています。留学生も多く、親しかったのは2人の中国からの留学生。入学して程なく、天安門事件が起こり、新聞を見た一人の友人は、『俺も戦う！』と、もう一人の留学生とともに、必死に止めたが、中国に帰ってしまいました。その後の消息がわからないまま、今日に至ります。学校での

思い出は、悲しいこと、楽しいことが、宝箱のようにいっぱいあります。

課題提出前になると、暗室を持っている私の家には、友人たちが押しかけ、私がバイトで、遅く帰るにもかかわらず、母の手料理を食べて、朝まで暗室作業をする友人たち。そんな熱心な友人たちに囲まれ、通常授業以外に、ゼミを3種選択し、中でも、卒業まで続けたのが、『女性写真ゼミ』と『水中写真ゼミ』でした。学生時代に取り組んだ専門には進めなかったけど、幅広く色々な物が撮れるフォトグラファーにはなれました。在学中は、様々な方面の勉強をさせていただきました。卒業前、学校のパンフレットにも登場させてもらいました。

写真業界でも、母校の先輩にお会いすることも多く、とても誇りに思います。学生の時は、熱心に、丁寧に、ちょっと怖くて、教えてくださった先生方。時々お見かけしたりすると、緊張します。

今回で、校友会は終結となり、同時にFOCUSも終了とのこと。思い出は、沢山ありすぎて、書ききれないくらいです。末筆ながら、今まで校友会を支え、運営をしてくださっていた、諸先輩方、先生方、改めまして、心より感謝申し上げます。お疲れ様でした。校友会は同友会へと変わり、今後の行方はわからないでしょうが、これからも、お元気でご活躍ください。

今後ともご指導、ご鞭撻を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

そして、これからも、同校を卒業された方々との交流ができることを願います。

東京ビジュアルアーツで学んだ頃

平成4年4月に入学して、平成6年3月に卒業しました。それから約28年の年月が経ちました。学生時代は、ロケーションや暗室で撮影した写真の現像（定着液、乾燥）を毎週金曜日に時間をかけて行った思い出があります。

当時、週末には自分で計画して、横浜、上野、浅草、代々木まで交通費を使い約四時間かけてフィルム四本撮ることを自身への課題にして、自分がアルバイトし



ていた写真家の所で現像させていただきコレクションしていました。

夏休みには田舎へ帰り、花火大会や盆踊りの風景写真など、一生懸命踊りをしている場面を写しましたが、シャッターチャンス撮るタイミングが難しい時は、あまり撮らないようにしていました。

ロケーションやポートレートは屋外で撮影したけれど、こつがあまりつかめなくて、勉強をして覚えるように、たいへんな努力をしていた事を思い出します。



思い出は、川又先生や卒業したみんな（仲間）。仲間とは、全然会っていないけど、何をしているかは、その内連絡してみたいです。

自分自身は、東京写真専門学校から東京ビジュアルアーツに変更した時期に在籍し、二年間の生活の中で、先生方や仲間と過ごした時間を得たことで、成長できたと感じています。東京ビジュアルアーツのおかげだと思いました。その内、東京に行くことになったら母校に遊びに行きたいと思います。



9001280 沈 建一 | TVAに在学中に撮った同級生（平成4年2月）



9104091 茂田 裕信 | 東京ビジュアルアーツに校名変更の時卒業 1-Fクラス 映画科 担任：小添さん担任



Kim Gun Jaeの学生時代の思い出2

※校友会創立50周年記念誌投稿：学生時代の思い出の続き

日本語を覚えたきっかけと日本での学生時代の思い出

私の学生時代の思い出といえますと様々な事がありますが、今回は私が日本語を覚えたきっかけや学生時代の思い出の順に話します。

私が日本語を覚えたきっかけ、今から約35年前になります。

ソウルで小学校6年生の冬休み〔12月20日頃～翌年2月上旬〕中の12月末頃、新聞広告に漫画研修院がソウルで初めて開院したという広告を見た私は、父たちに頼み込み冬休みの期間中に学院に通える事になりました。学院のドアを開けて中に入ったら、日本アニメ関連の色々なキャラクター達のポスター、雑誌、ハンカチ等が飾ってありました！それらは生まれて初めて見る物ばかりで、当時は大きな驚きでした。

約一ヶ月半後で冬休みが終わり学院の研修も終わり、卒院時に学院からアニメ雑誌『ジ・アニメ』をプレゼントしていただきました。家に帰り、始めは雑誌の絵だけ見ていましたが、日本語の文章は分からないので、父に読んでもらいました。しかし、父も学生時代に学んでから数十年間全く日本語を使わなかった為、殆ど忘れてしまっており読めたのはひらがなとカタカナのみでした。

ある日、父が「これからはお前自身が50音図から勉強して、自分で読みなよ～」と言い、1970年代後半〔昭和50年代後半〕に発売された日本語教材を僕に渡しました。そして最初は一文字、一文字、線を引くやり方で読み始めました。

中学校2年生頃から冬休みを利用し、外国語学院でマンツーマン方式で日本語を学びました。その後、入学した高校では週2回の選択授業（韓国では日本と違って第2外国語科目〔英語以外の外国語で日本語、中国語、ドイツ語、フランス語、イタリア語等々〕で、日本語を選択。本格的に授業で日本語を勉強し、趣味で買ったプラモデル雑誌やアニメ雑誌が少しづつ読めるようになりました。

次は学生時代の思い出です。

1年生の時に修学旅行で長野県軽井沢に行った際に観光バスの窓から見た活火山（それは生まれて初めて

見る光景でした）や軽井沢の町中を歩いている野性の猿達も……それらが、印象に残っています。

2年生の時、平成10年8月に東京品川駅8番ホームで行われたアニメドリームトレイン1999というイベントでアニメ銀河鉄道999の主演モデルになった本物の蒸気機関車C62号機を見ました。また、東京新宿駅南口のルミネ特別イベントで銀河鉄道999、宇宙戦艦ヤマト等で知られる漫画家・松本零士氏ご本人に目の前で会った事が思い出です。

また、卒業作品制作で悩んでいた時に、校長先生（当時：西山卓也校長先生）の紹介で諸河久先輩と知り合い、SL写真を撮るためのポイントをアドバイスをして頂きました。そして、静岡県の大井川鐵道と栃木県の真岡鐵道に撮影に行くことを決め、更に鉄道撮影関連のビデオテープを学校の図書館で借りて何度も見ながらそれらを撮影の参考にしました。

生まれて初めて東京駅から新幹線に乗りました。二度に渡り、静岡県金沢駅～千頭駅（大井川鐵道）、栃木県茂木～下館駅（真岡鐵道）に行って、本物の走る蒸気機関車達を見ながら写真を撮った事。2年生の終わる頃、学校で行った卒業旅行で長野県に寄って松本城を撮影した事が思い出に残っています。

それらをトリミングして2年生卒業作品として発表しました。

それから翌年の3年生の卒業作品として何を発表すれば良いのかについて数ヶ月間悩んだ末、私が幼い頃から大好きで良く遊び、今現在も大好きで当時から持っているロボットフィギア（通称：スーパーロボット系列）を数日に渡り学校のスタジオに毎日一体づつ持ち込み、アニメのオープニングやエンディング、アニメの各種、雑誌表紙のイラスト等々をイメージして撮り、それを3年生の卒業作品として発表しました。

これらは全てが当時の韓国のテレビでは、絶対になかなか見ることが出来ませんでした。



5月になると決まって思い出すのは、新緑の上高地です。

朝靄に青く静まる大正池、陽を浴びて生き生きと輝く木々、たくさんの人で溢れる河童橋。

それから駐車場の隅で焼く目玉焼きトーストや、無料だけど電気のつかない温泉。そして、ウイスキーの牛乳割りを飲みながら色々な話を聞かせてくれる宮本

先生！

学生時代の事と言えば、失敗や後悔ばかりで思い出したくない事も多い劣等生でありましたが、風景写真のゼミはいつもとても楽しくて、とても大切な時間でした。

そんな時間を与えてくださった宮本先生に感謝！またお会いできる日を楽しみにしています。

歴代の FOCUS



校友会活動の経緯・校友会に関わった40年

校友会・副会長 平野 正志

54年の長きにわたり続けてきた校友会も、その役割をついに終えようとしています。

初期の校友会が学校開設当初から鳥の会などの名称が始まり、その後の停滞状態から新たな校友会に活路を得たのが、私が学校を卒業してすぐの頃でしたから、その頃からでもすでに40数年の時を経ています。

「再開初期」

再開初期、当時の故・米本会長と元校長の西山先生の呼びかけで、第一回会合が学校の大教室で開かれ、その時は各年度、学科の卒業生が2名ずつ集まり、総勢は50～60名になったのではないかと記憶しています。会合後は何のお礼もできませんので、坂の下にある浅野屋（蕎麦や）からかつ丼などのどんぶりものやそばを取り、ささやかなお礼とした事も記憶に残ります。

年一回の総会の後には、当時活躍していた卒業生の講演会を行ったり、懇親会も学校内で手づくりで行いました。その後、米本会長の関係でタモリを呼んでの講演、牧伸二などを呼び懇親会を盛り上げたイベントも思い出にあります。当時は総務に中田先生が当たり、その助手のように私が総務の手助けを命ぜられていたと記憶しています。

当初、学校の教室で手づくりで行われていた総会・懇親会が学校を離れ、お茶ノ水駅すぐ近くのレストランのような所で行われたり、銀座のやはりレストランで行われたりの時期もありました。一番盛んだった頃には100名以上の参加者を得て後楽園飯店（ホテル）で行っていた事もあります。

時が経つにつれ次第に役員だった先生方が抜け、卒業生有志のみの役員会となった後は、一時事務員のようなアルバイトの方に来ていただいたりして校友会事務を続け、学校の教室を文化祭に合わせてお借りして、総会・懇親会を続けていました。

「コンピューター時代」

そんな校友会の活動の中でも、コンピューターの登場が大きな変化とその後の発展に関わる事柄として記憶しておく事が必要かと思います。当時まだまだアナログの世界だった学校に先立ち、いち早くコンピューターを導入し活動を始めたのが、役員で先生だったY先輩と西山先生だったわけで、その事がきっかけで学校も時代に乗り遅れずにコンピューターを導入することになりました、その後のコンピューター社会への急展開は目を見張る所でもあり、あの時点でコンピューターへの転換をいち早く進めた事は先見の明があったと言えるでしょう。今ではコンピューターなしの作業が考えられないほどですが、こんなに短時間の間に急激な発展につながろうとは、同時にほんの20年ほどの間に写真がフィルムからデジタルにとって代わってしまうとは、その当時だれも予想はしていませんでした。

いち早く取り入れた当時のコンピューターの性能は今と比

べれば玩具のようなものでした。コンピューターの導入と名簿管理などを始めたY先生の貢献は校友会初期においては多大なものであったと思います。ところがその先生が学校を急に辞められて、しばらくすると当時の玩具のようなコンピューターでは実質上も役に立たなくなってしまう、コンピューターの技術や知識を引き継ぐ者も無くしばらく時間が過ぎてしまいました。再び校友会も停滞し始めたころ。その後の活動をどうするか皆が悩み始めていた時に、新たにコンピューターを購入し名簿管理を始めようという動きが出てきます。ところがその活動をやる人が見つかりません。仕方なくコンピューターの知識も無く、触れた事もない私が抜擢される事になります。ワープロこそ日常使用する事に慣れてはいましたが、MS-DOSからウインドウズに転換時期のコンピューターがあてがわれる事になりました。当時は本体・モニター・プリンターのセットで100万円ほどした機材でした。届いた機材を組み立て、使用するにはOSをインストールする必要もあります。20枚ほどのフロッピーディスクを次々に入れ替えながらのインストールは簡単には行かず、最後の1枚でエラーになり始めからやり直しなどの作業を数回繰り返した後ようやく、コンピューターが動き出しました。とはいえ今のように何事も簡単には行かず、MS-DOSではプリントするにも命令文を打ち込んだりのような状態でコンピューター作業が始まります。すぐにウインドウズになると少しは快適に作業できるようにはなりましたが、なにしろ始まりはコンピューターにかじりつきで格闘しているような日々が続きました。

「名簿管理」

住所管理が目的でもありましたし、当時の卒業生は数千名はいた時期でした。次の年にはFOCUSを発送しなければならない、それまでに名簿を完成させ、とりあえず発送できるようにしなければならないということで、色々検討の末、住所管理用にデータベースソフトを導入する事になります。ただ、コンピューターにはようやく慣れてきたもののデータベースというソフト自体には初めて触れるもので、とりあえず一覧表のような項目を作って名前、郵便番号、住所を入力して一覧を作れば住所の印刷が出来るだろうと見当をつけます。新たにウインドウズ用にデータベースソフトを購入して、新たな入力を始めます。

元になるデータは学校に保存されている学籍簿、身上書の紙の書類から必要部分をコピーに取りそこから現住所（入学時の）、帰省先住所などのデータを打ち込みます。その時点でも数千に上るデータの一つずつ拾い上げる作業には結局1年近くの年月がかかりましたが、何とかその年のFOCUSを発送する事が出来ました。学校から持ち出せないオリジナルの学籍簿等の書類は住所部分のみをコピーして、自宅での入力作業が始まります。1年過ぎれば新たな卒業生が出て、そのデータもさらに入力が必要になるなどして年々データベースは充実してゆきました。

データベースがとりあえず完成して、一番初めに発送した FOCUS は半数近くが戻ってしまいました。数千単位での返送の山でした。10年以上前の入学当時の住所資料に基づいての発送で、すでに永い年月の過ぎた書類上の現住所は無効になっているものも沢山あったわけです。返送された住所を修正し、帰省先の住所に送りがえし、さらに住所の変更などを得て、修正を繰り返しの作業を毎年繰り返すうちに次第にデータベースも確実なものになってゆきます。

「時代の流れ」

最終的には3万名を超える会員に膨れ上がり、最大で2万名に FOCUS を発送するまでになりましたが、時代の流れで入学生数の減少や、それにとまなう校友会費の減少などにより住所調査を兼ねた FOCUS の全員送付が不可能となってしまいました。

年会費としての維持会費会員制度に決定してからは、在校生と卒業後3年間の新卒者、年会費の維持会費会員だけへの発送となり、3千から5千部程度の発送に留まる事になります。その時点で毎年、全卒業生に発送していた FOCUS による住所確認や住所調査も、行われなくなるわけですから膨大に収集した情報は毎年の確認手段のないまま次第に不確実なものになってゆきます。

さらに個人情報保護法が出来ると、新卒の卒業生名簿自体も校友会への任意登録となり、毎年卒業時に配布していた名簿の制作も止める事になると、事実上卒業生全員の名簿収集もかなわず、それまで蓄積してきたデータベースの信頼性もさらに大きく損なわれてゆく事になります。FOCUS と同時に封入している住所調査も、結局は維持会費会員のみへの調査という事になると、そのほかのデータは次第に古く確実性の薄いものになっていってしまいました。

また、その後は「同友会」の発足に向けての動きの中で学校からの校友会費の入金も無くなりましたから、新卒者の名簿入力も打ち切り、在校生、新卒生への FOCUS 配布も住所調査も無くなり、毎年送付する FOCUS は維持会費をお支払いいただく維持会費会員のみ、約250名程度から150名程度への住所確認などの状態となります。送付数が減り調査自体が限定される中で、毎年維持会費会員が減少してゆくという過程で次第に縮小へと進む事は目に見えていましたし、名簿は存在しますが年を経るごとに不確実な状態で推移し、新たな住所調査も維持会費会員のための細々とした状態が続いて現状へとつながって来ます。

「同友会に期待して」

その間、校友会継続へ向けて新たな協力者を得ようと努力しましたが叶わず、時代のニーズにも取り残されたように若い卒業生から賛同を得られない状況を確認しつつ、同時に学校職員側から WEB による校友会という「同友会」の発案を得て、ある意味では渡りに舟のような心境で、同友会への移行を進め、同友会発足に向け FOCUS に経過を報告するなど校友会なりの協力を続けてきたわけです。

50年近くにわたり続けてきた FOCUS も本年最後の FOCUS 発行となり、当初住所確認のデータが有る卒業生全員（約2万名）への最終号発送なども検討しましたが、制作費、発送料だけでも膨大な金額となり、現在の財政状態では資金的に不可能という結論になりました。

ここ数年の間、「同友会」の発案を学校側よりいただき、何度も話し合いや議論を進めてきましたが、校友会の卒業生に向けた視線とは一線をかくした同友会の発想は、学校や直近の卒業生への SNS での活動をしてゆくというもので、校友会の考えてきた「同窓生のための校友会」という発想とは相いれる所がないまま、役員も私も含め皆さんもすでに高齢化を迎え今後の活動継続には不安を抱える状態となってしまいました。現役員会自体40年近い活動経験を積んでいる方ばかりで、新たな活動の方策も見つからず、同友会活動を応援する記事や案内を過去数年にわたり FOCUS に掲載し、現時点では活動の現状が確認できませんが、今回同友会が別の形で活動を継続するだろうという期待のもと、校友会活動は終息する事といたしました。

長年にわたり、卒業生のための校友会を継続し、少しでも皆さんのお役に立てた事は誇りでもあり、学校の若い先生方・卒業生による新たな同友会活動が実を結ぶ事を願って、エールを送る事でひとまず校友会活動は終了する事といたしました。

やはり、時を経ないと分からない事もあるのではないかと思います。学生時代を懐かしく思い、かつての友を懐かしむ、その時、卒業生の会が核となり長年離れていた人々を結びつける情報を提供できる、校友会の活動自体は地道な日々の活動の継続で、卒業後すぐには意味を持たない活動も数十年の継続で意味が生まれてくる、時を経て、そこにこそそのような架け橋を可能にするそんな活動でもありましたし、卒業生の一人として今後同友会に望む事もそのようなことに尽きると思っています。

■今後のお問い合わせ等

本年総会をもって校友会は幕を閉じます。その後は残務処理をしばらく続けますが、郵便振込口座は閉じてしまいますので、会費等の送金は受け入れられません。また FOCUS も最終号となりますので、短信などお送りいただいても掲載できなくなります。メールアドレス、私書箱はしばらく続ける予定であります。

実質上の校友会活動は、学校運営の「同友会」に移りますので、ご質問等、学校担当者までお問い合わせください。

医学の世界で活躍する 「医学写真ゼミ」の卒業生たち

西山 卓也

(ビジュアルアーツ元校長)



1967年「医学写真ゼミ」はスタートしました。

日本医学写真学会会長で東京医科歯科大学
フォトセンターの廣瀬文雄先生を中心に、大
学病院のドクターに指導をお願いしました。

医学の進歩は、チームで行う組織医療とな
り、チームの中で写真技師は必要不可欠な存
在で「医学写真ゼミ」の卒業生は日本全国の
医療施設に就職して行きました。

卒業生には、館山誠（帝京大）、宮澤六郎（東
大医学部）、岡部重治（日大）、長谷川健一（癌
研）、高橋一夫（帝京大）、塔野岡哲也（東京
女子医大）、鷺野谷秀夫（筑波大）、鈴木豊（東
京女子医大）、早狩亨（城西歯科大）など、
40以上の医療施設で写真技師の仕事をしてい
ます。

「医学写真ゼミ」での授業内容は、患者撮影、
ライティング、手術撮影、摘出標本撮影、顕
微鏡撮影、胃カメラ、エックス線、スライド
制作、医学概論、解剖、病理、生理、微生物、
など専門的な科目を履修します。

東京医科歯科大学で医学部の医学生が行
う、遺体の解剖実習に立ち会ったり、東大医
学部や東京女子医大の手術撮影の実習を行
いました。

日本医学写真学会の歴史は古く昭和40年に
創立し、医学写真の技術向上を目的に写真技
師、医師、看護師、検査技師、からなる数百

名の会員を擁する学術組織です。

本校の卒業生は学会員として、数々の研究
論文を発表してきました。

時代の変化とともに、写真の世界も進化し
ました。白黒写真の時代→カラーの時代→CP
の時代→AIの時代と。

特にアップルから発売されたマッキントッ
シュコンピュータとアプリケーションソフト
の出現は、写真の世界を一変させました。ワー
ド、フォトショップ、パワーポイント、動画
編集のプレミアなど。

進んだアメリカ医学会のプレゼンテーショ
ンに追いつこうと、みんなで技術講習会を開
き勉強しました。

AIの時代を迎えるいま、進化し続ける医学
の世界で写真技師の真価がますます期待され
ます。

「写真技術なくして、医学なし。医学の対す
る写真の貢献度はますます増大する」

(筑波大学元副学長、榊原医学博士)



加藤茂晴さん（癌研有明病院フォトセンター室長）

2018年 校友会総会報告

10月27日、6時よりアルカディア市ヶ谷で38名（役員先生方を含む）で総会を始めました。来年総会で校友会の解散宣言をする事について、その確認を経過説明の初めにおこないました。「経過報告」……経過説明の中で学校への質問状送付とその経過を説明し、その回答として「学校学務の橋本先生の発言」を求めました。

質問状については、校長病気のため、学務まで内容が伝わっていなかった事で回答が遅れたとの事、結局校長も辞め新たな校長が決まる事になっているとの状況が述べられる。

現在、同友会は学務が対応し、職員室の卒業生先生方を中心に、立ち上げるべく努力中であるとの説明がありました。

卒業生からは、すでに2年ほどの時間が過ぎ、その間の卒業生への対応が全くない状態は事実としてあり、それらの卒業生も含めて早急な対応と、同友会の設立が急務であるとの苦言を学校側に伝える。

学校側としては同友会の早急な設立を目指す、内容としてはSNSを基本とした会である事は変わらないようで、この点に関しても卒業生から、インターネット弱者に対する対応を望む声も伝える。

校友会の現状として来年9月には最後のFOCUSを発行する事になる、現在の計画として今まで校友会にアクセスした事のある卒業生約1,200名に送付し、終結の案内をする事とするが、その折には同友会の設立と校友会から同友会への移行希望者、同友会へ

の参加希望者への案内を載せる必要がある。したがって編集時期までに同友会が設立されていないと移行への案内をする手段が大幅に損なわれる事も、学校側に伝える。

設立が急がれる事は伝わったのではないかと思います。

その後「会計報告」、「監査報告」を行い、卒業生からの質問として残金の処理についての質問に答える形で、次年度の会計として、残る予算の内その多くを校友会終結に関するニュースを卒業生に伝える事とした。現在維持会費会員は100名少しなのでその他、今まで校友会に対し住所変更などアクセス経験のある約1,200名にもFOCUSを送付する事で、予算を有効に使いそうだという提案をする。現在住所確認のある2万名に本来は通知する必要があるが、それでは通常版のFOCUS送付だけでも200万円以上の予算が必要で、制作費等を考えると会員全員へのFOCUSの送付という事は不可能と言える。そこで、最終号のFOCUSを特大号として卒業生からの原稿等を募集して予算内で増補版を製作し上記該当者1,200名に送付、終結を知らせるのが現実的だろうとの説明をする。

「役員改選」については残る1年、現在のままの継続を承認され来年10月総会までの継続を実行する。

以上で総会を終える。

その後、学務の橋本先生も交えて懇親会を行い、来年の再会を願い閉会といたしました。



■東京ビジュアルアーツ同友会

名 称：東京ビジュアルアーツ同友会
連 絡 先：E-Mail douyukai@tva.ac.jp
所 在 地：〒102-0081 千代田区四番町11
東京ビジュアルアーツ内

facebook：fb.me/doyukaitva

会 長：高山 太郎

副 会 長：鶴沢 信明／竹 章一

活 動 内 容：SNSなどを通じた在校生と卒業生の交流、就職やデビューに向けた情報の共有、同友会員の創作活動の発信、在校生へのスカラシップ

※校友会会員の皆様で同友会へ参加をご希望の方は上記のメールアドレスまでご連絡をお願いします。

※総会の開催日程等に関しては上記facebookページにて告知をさせていただきます。

令和元年度 東京ビジュアルアーツ学園祭 [Thanks you for Various Affection]

今年の学園祭は「愛」テーマに行ないます。
様々な愛情に感謝という意味。先生方からの愛や仲間からの愛、そして家族からの愛があるからこそ生きられる
(タイトル立案：ダンス学科2年 田村涼夏)

11月2日(土)・3日(日) 10:00～17:00 入場無料
東京都千代田区四番町11
東京ビジュアルアーツ四番町校舎にて

各学科の在校生やAOプレスクール生(入学前授業に参加している入学予定の学生です)が練習や勉強の成果を発表します。後輩たちの活躍を是非見にいらして下さい。

2019年 校友会総会&懇親会のお知らせ

2019年10月19日 (土曜日)

場 所：アルカディア市ヶ谷・私学会館

総 会：18時00分から

懇親会：18時30分から

会 費：3,000円 (事前予約・振込用紙をご使用ください)

今年も市ヶ谷駅すぐ近くのアルカディア市ヶ谷・私学会館で、校友会総会&懇親会を行います。

東京写真専門学院、東京写真専門学校、東京ビジュアルアーツでお世話になった先生方、懐かしい級友たちも集まります。連絡の取れる仲間達をお誘いの上、お出かけください。

今年の会費は3,000円です。奮ってご参加ください。

※事前予約。振込用紙での振込にご協力ください。(当日受付も可能です)

※懇親会会費振込期限：9月25日まで



地下鉄 有楽町線・南北線：

市ヶ谷駅 (1またはA) 出口から徒歩2分

地下鉄 新宿線：

市ヶ谷駅 (A1またはA4) 出口から徒歩2分

JR中央線 (各駅停車)：市ヶ谷駅から徒歩2分

2018 経過報告 (2017/9~2018/10)

2017年

- 9月20日 会計締め
- 10月12日 総会前役員会
- 10月28日 総会・懇親会 アルカディア市ヶ谷にて
- 11月20日 役員会・総会の総括・質問状について

2018年

- 3月5日 役員会・質問状内容検討・送付
昨年総会での質問内容をまとめ、学校長あて送付。
合わせてメールなども同内容で送付を
以下のように繰り返しました。
- 6月初旬 質問回答催促状送付
- 7月初旬 質問回答催促状送付
役員会編集会議までに具体的なご回答を得られ
ませんでしたので、事務局係長からの回答も含め
て、実質回答なしの経緯をそのままにFOCUS
掲載に踏み切りました。
- 7月17日 役員会・編集会議・質問状実質回答なしへの対処
発送200通・印刷350部・編集レイアウトは外
部委託
- 7月30日 編集会議・編集プロダクションに原稿渡し
- 8月初旬 編集会議・FOCUS校正
- 9月5日 FOCUS発送・約200通送付。
- 9月20日 会計締め・会計監査 ※維持会費、現金残高、
定期残高など
- 10月5日 総会前役員会・会計監査報告/総会準備など
- 10月初旬 学校長交代などの情報が入る。
- 10月27日 総会・懇親会 アルカディア市ヶ谷にて

上記のように役員会、会議等も縮小しての開催になりました。学校長への質問状の回答を得られないまま、10月に入り学校長交代などのニュースが入り未確定な部分も多い結末ですが、同友会に関する経過は学校からの説明を待つしかありません。終盤を迎えるリミットだけが迫っておりますが、以上のように進行しております。

■役 員

(総務2018年10月)

会 長	宮本 宏
副 会 長	諸河 久・平野 正志
会 計 監 査	森脇 せつ子
会 計・総 務	平野 正志・須山 貴史
名 誉 会 長	坂口 哲也
アドバイザー	西山 卓也・日比野 彰

平成29年度(2017-2018) 会計報告・監査報告

(円)

支出の部	
総会費 (懇親会補助・その他)	208,688
印刷編集費 (機関紙42号 158,760) (振込用紙 702)	159,446
役員会議費	189,929
人件費	449,650
通信費 (宅急便 37,823・切手他 22,602) (DTI 82,772)	122,184
事務用品費	6,447
交通費	15,300
手数料 (銀行 1,728) (郵便振替 22,080)	23,924
雑費	59,938
修繕費	13,554
コンピュータ関係費	226,932
合 計	1,475,992

収入の部	
維持会費・懇親会費を含む	269,000
利息 (普通預金)	9
平成28年度繰越金 普通預金	731,296
郵便口座	1,745,457
現 金	113,860
合 計	2,859,622

現金・預金の部	
現金残高 (総務・事務局)	604,518
普通預金 (みずほ銀行・No742719)	402,478
郵便振替口座 (00170-5-547136)	376,634
合 計	1,383,630

資産の部	
定期預金 (三菱UFJ銀行・No1669009)	2,203,444
(利息含む)	(3/28満期)

収 入	2,859,622	現金・預金残高	1,383,630
支 出	1,475,992	定 期	2,203,444
残 高	1,383,630	残 高	3,587,074

(2018年9月20日現在)

会計 平野 正志 会長 宮本 宏

会計監査報告

平成29年度、上記会計報告に関し平成30年9月20日会計監査の結果、これに相違のないことを確認しました。ここに会計監査報告としてご報告いたします。監査 森脇 せつ子

懇親会パーティー会費振込に関して

本年最後となる総会・懇親会ですが、10月19日総会の後、懇親会を行います。懇親会費は例年通り3,000円とし、お送りするFOCUSに振込用紙を同封させていただきます。例年通り予約制で校友会郵便振替口座宛て同封の振替用紙でご送金ください。

維持会費は今総会までで、以降は廃止となり、総会後速やかに郵便振替口座は閉鎖する予定であります。なお数日間の猶予をいただきますので、それまでにお振り込みをいただいた場合には、規約にありますように寄付金

扱いとさせていただきます、残務処理の費用に充てさせていただきます。

郵便振替口座および普通預金にある残金は、今後数年間の残務処理等の資金として活用させて頂く予定です。現在の所、ホームページおよび私書箱は資金の続く時点まで継続予定であります。

2019年9月10日締めとなる今回の会計報告は最終号となる本紙には掲載できませんので、例年通り総会での報告とさせていただきます。

口座記号番号 0170-5-547136

金 額 3,000円

加 入 者 名 東京ビジュアルアーツ・校友会

*大変恐縮ですが一度振り込まれた懇親会費はお返しできません。郵便振替・払込取扱票をFOCUSに同封しておりますが、校友会からのFOCUSが届かない等の場合には郵便局に備え付けの用紙にご記入ください。

校友会ホームページ

最終号のFOCUSは44号になります。なお最終号の内容は校友会ホームページのトップページにPDFファイルへのリンクを設定しています。ダウンロードしてご覧いただけます。是非ご一読ください。

ホームページ <http://www.zephyr.dti.ne.jp/~tovi>

メールアドレス tovi@zephyr.dti.ne.jp

維持会費納入者 (敬称略、順不同) 2018年9月から2019年7月取り扱い分

遠藤 明博	丹 久俊	端 衆一郎	岡本 正善	吉村 真里	藤田 容子	畑 博巳
坂井 いちろう	佐生 ひふみ	坂口 哲也	長野 寛	中村 和雄	佐久間 滋	須山 貴史
大石 武	角 宣幸	鎌澤 久也	森 明彦	山口 比佐夫	渡辺 茂夫	志賀 直人
菊地 良祐	牛山 雅英	田中 一夫	山崎 堯	伊藤 公一	中田 健造	伊藤 豊
石倉 栄子	富岡 甲之	樋口 牧子	石橋 眞孝	市橋 さつき	菊地 喬	椿 誠一郎
平野 素子	熊坂 宗相	竹田 恒雄	千葉 学	坂野 晶行	新田 顕脩	圓谷 美幸
平野 正志	鈴木 幸子	三枝 政樹	杉本 誠	松島 敏章	露木 千恵	椿 誠一郎
遠藤 弘之	五島 三徳	大西 敦	佐久間 康弘	誉田 慎一	伊藤 明彦	三宅 正浩
星 慎一郎	瀬戸 弘之	官能 光正	塚原 明生	野内 進	長野 正伸	林 隆久
柴木 勉	腰塚 昌子	山田 俊造	武田 文江	山田 祐子	渡邊 英昭	奥村 浩司
松村 洋道	安陪 統子	横山 浩二	大久保 光男	岩渕 幸浩	内藤 律子	松本 純子
梶山 智	近藤 久修	宮本 大介	諸河 久	中村 貞行	白井 朝子	井内 清満
平野 易快	徳山 龍一	宮本 宏	薄井 正行	青木 みね子	白石 政樹	金子 博
桑原 尊義	竹田 勝秋	宮本 正子	富田 正広	高橋 学	児玉 成一	水谷 光良
小林 博	服部(弘保) 佳子	黒澤 富雄	高野 明	塩崎 隆	薬師 洋行	高橋 孝二
小西 和直	秋谷 真樹	榎原 光晴	山田 省蔵	武下 巧	根岸 亮輔	佐藤 光夫
土屋 健治	森脇 せつ子	大宮 孝介	石田 康正	西村 淳子	鈴木 昭吉	
高内 純平	赤池 憲治	小倉 栄一	宮野 明義	成田 秀彦	足立 寛	
高橋 晃	大塚 俊一	福井 一則	西村 多美子	中馬 一隆	雨宮 眞二	
柳沢 雅春	深澤 敏行	平野 雅子	西田 勉	木村 正博	藤井 一広	
渡辺 祐司	植松 喜代光	早川 茂樹	酒井 久美子	海宝 経雄	久下 卓	

東京 ビジュアル アーツ・ 校友会 規約 (2017年10月現在)

- 名称 本会は、東京ビジュアルアーツ・校友会とする。
- 目的 本会は、会員相互の親睦と交流並びに写真、映像、音響等の専門分野における会員相互の確立を目的とする。
- 資格 本会員は、原則として本学卒業生とする。
- 組織
 - 本会は、会長1名、副会長2名、記録2名、会計2名、常任幹事、会員により構成される。(常任幹事は各卒業年度より選出する)。
 - 上記役員は、会員より選出し役員会を構成する。
 - 役員任期は、1年とする(常任幹事はこの限りではない)。
 - 役員会は、会長、副会長、記録、会計、常任幹事を以って、これを構成する。
 - 会計報告に対して、監査役を設けて、監査を受ける。
- 運営
 - 会長は、本会の運営権を代表して会務を総務し、役員会及び総会を招集する。
 - 副会長は、会長を補佐し、会長に事故あるときはこれを代理する。
 - 常任幹事は、会務を処理する(総務、企画、広報)。
 - 緊急を要する事項を協議する場合には、会長は役員会を招集する。
 - 役員会の決議事項は、総会・その他においてこれを報告するものとする。
 - 会の運営は、会費並びに寄付によるものとする。
 - 維持会費 年会費 1,000円
 - 寄付行為
- 定例総会
 - 本会は、毎年秋に定例総会を開く。なお、必要に応じて臨時総会を開く事が出来る。
 - 総会では次の事項を決定する。
 - 本会規約の制定と改定
 - 予算と決算の承認
 - 役員選出
 - その他の重要な事項
- その他の細目は、総会、役員会出席者の過半数の決定により、他の干渉を許さない。

1965年入学		
佐藤 光夫	写真	傘寿を前に、仕事関連、地元写真クラブなどで切磋琢磨していたこと。作品仕上げに夜更けを背に引き伸ばし機と奮闘していたことなど、つい昨日のことのようだ。デジタル時代に入り、制作意欲も減退甚だしいが、終活を念頭に、はまりこんだ写真世界（大げさだが）の中をウロチョロしている昨今である。
1966年入学		
宮本 宏		勤務先削除・メール削除
1967年入学		
西村 多美子		11月7日から30日までパリで個展を開きました。よろしくお願ひ申し上げます。
井内 清満		職種変更をお願いします。若者立ち直り支援。
1968年入学		
柳沢 雅春	写真	変更ありません
富山 愛子		9月11日マダガスカル写真集を発売しました。宜しくお願ひします。
1969年入学		
菅田 慎一	写真	現住所記述変更
早坂 明	写真	住所変更届け
金子 茂生		校友会終了を会報で知りさみしいなあ一と思ひまして、「思い出写真展」のような展示を現在の「ビジュアルアーツ」で開催できないものなのでしょうか？という相談をしたかったのです。不幸にも？私のようなヒマな奴もいますので……展示飾り付けぐらいなら手を貸せるのではないだろうか？（もちろん、無償ですよ）カラー・モノクロOKで四つ切額入りなどの応募規定で……メールではうまく言えないので、一度お会い出来るとよいのですが？
1970年入学		
小林 博	写真	本年末で85歳になります。パーキンソン病も進行し最近自身も身体も動く事すらままなりません。残念ですが今回を持って本会を脱退させていただきます。長い間有難うございました。貴校の益々のご発展を祈ります。
薄井 正行		今回もパーティー参加できませんがよろしくお願ひいたします。
吉岡 逸夫		お世話になっております。卒業生・吉岡逸夫の妻でございます。夫は昨年病気のため他界いたしました。生前大変お世話になり、ありがとうございます。

1971年入学		
宮本 正子		住所変更、帰省先勤務先削除
渡辺 祐司	写真	葛飾北斎の美学：映像の持つ客観性と記録性に心を惹かれ、永く友としてことし72歳に。しかし、会心作にはほど遠く撮影のたびに忸怩たる思いしきり。江戸時代後期の浮世絵師北斎（1760年生まれ88歳没）は「73歳で生き物や草木の造りを知るようになり、86歳ともなれば腕は更に上達し、90歳で興義を極め、100歳で神妙の域に達し、100歳を超えては生きて命を得たように描くだろう」と述べたという。世界的大作家の情念の炎に、凡人はひたすら驚愕の思いです。＊校友会総会&懇親会へ一度も出席できないまま解散となり、FOCUSは今回で最終号とのこと。パーティー会費を振り込みましたが、スタッフの皆様へ差し入れます。永い間ご苦労さまでした。
山田 典子	写真	宮本先生お元気でしょうか。同じクラスだった渡辺茂夫さんから連絡を頂きました。もう卒業してから46年も経ちましたので卒業年度や、会員番号が不確かです。学科は商業写真で、最後は日比野先生のクラスでした。FOCUS最終号の寄稿文の内容は自由にということで私事を書いてしまいました。写真をやっていて良かったという思いです。よろしくお願ひします。
1972年入学		
鈴木 昭吉		先週、川上清さんから10月27日の校友会が最後になるから出席しないかと誘われ、参加するつもりでいるのですが、昨日FOCUS43電子版をチェックしたところ事前予約と会費振込が必要だと知り慌てています。これからでは遅すぎるとは思うのですが、参加が不可能であれば諦めます。ご連絡ください。よろしくお願ひします。
高橋 孝二	写真	仕事を引退しました。
雨宮 眞二	写真	郵便番号変更、e-mailアドレス変更しました。
1973年入学		
石橋 眞孝	写真	歴代会長様はじめスタッフの皆様方には、半世紀に及ぶ校友会のボランティア活動に對し心より敬意を表します。本当にご苦労さまでした。有難うございました。
富田 正広	写真	ライフワークで、最近自然現象（雲、空）と野生小動物を撮っている（主に野鳥）。
1975年入学		
石川 典男	写真	とうとうカメラを全部ソニーのミラーレスにかえてしまいました。α9が出てからα7RⅢ・α7Ⅲトットと一眼レフに追いついた感じなので思いきりました。結果は上々。仕事は学校写真と演奏関係ばかりなので音無しで撮れるし、ファインダーも良くなったし、これでカメラマンとしての現役寿命がのびました。技術の進歩はありがたいです。フィルム現像が上がるまでドキドキしていたのがつかしいです。
高橋 晃	映画	2018年より桜美林大学にてデジタルデザイン、インフォメーションデザイン講師を務める事になりました。2017年1月7日から22日まで写真展「横浜、青の時代」をギャラリー・爾麗美術にて開催しました。

写真展のお知らせ 開催報告

**JPS主催
チャリティー写真展**
2018年9月26日～10月2日
FMエキシビジョンサロン銀座
卒業生JPS会員、多数参加。



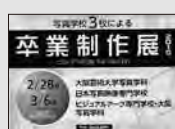
おやじ倶楽部「七人の眼」
2019年3月21日～27日
アイデムフォトギャラリー「シリウス」

東京写真専門学校・学校、ビジュアルアーツで教壇に立たれた先生方のグループ「おやじ倶楽部」の9回目の写真展になります。初日オープニングパーティーには沢山の卒業生や教えた子たちが集まり、にぎやかに展覧会を祝しました。校友会会長・宮本宏氏が乾杯の辞を述べられました。卒業生一同10回目以降の展覧会も続けられます事を期待しております。



成田 秀彦 主催する「成田光房」の展覧会。
2018年10月29日～11月10日 藤田正彦展
2019年1月29日～2月3日 ブサイの部屋・長沼宏昌
2019年1月29日～2月3日 美学校の記憶・成田秀彦
2019年3月25日～30日 光房展

東京ビジュアルアーツの卒業制作展



東京・大阪二つの東京ビジュアルアーツの卒業展が「写真学校8校による・写真学校3校による、卒業制作展」として、それぞれ東京・大阪の二コプラザで行われました。

二人展「春・夏・秋・冬」

2019年6月6日～12日まで
アイデムフォトギャラリー「シリウス」

俳句と写真のコラボという面白い試みの写真展。2回目となる展覧会で、俳句：沼田庸、写真：中田健造のコンビが見事なコラボを見せた写真展となりました。



諸河 久「鉄路散策」 第8回校門鉄道会写真展

ギャラリーアートグラフ 2018年10月19～25日

日本大学鉄道研究会OBを中心としたグループ、日大出身でもある諸河氏の例年の展覧会。10月19日オープニングパーティーが「銀座PPサロン」で開かれました。



平野 正志 下記に参加しました。

2018年10月28日～11月3日 「写真アートTOKYO 2018」 飯田弥生ギャラリー
2018年11月4日～10日 「DIGITABLE 2018 Excite」 江東区森下文化センター
2019年12月 「写真家たちによるチャリティー展」 光村グラフィックギャラリー
2019年1月17日～23日 写真集団・北斗「今そこに注ぐ視線 VII」
アイデムフォトギャラリー「シリウス」
2019年4月28日～5月4日 「花の表情展2019」 練馬区花と緑の相談所
2019年5月23日～29日 「花 写真展2019」 ポートレイトギャラリー

1977年入学		
鎌澤 久也	写真	帰省先住所修正
1978年入学		
福井 一則		長い間有難うございます。そしてお疲れ様でした。
1979年入学		
大西 敦	写真	変更ありません
1980年入学		
山田 俊造	写真	お世話になります、元気でやっています。
林 隆久	写真	帰省先住所削除
1982年入学		
高内 純平	写真	photojournalistを志して、大学を卒業してから、東京写真専門学校に入学しました。今もまだ、その志は捨てていません。
1983年入学		
角 宣幸	写真	勤務先電話番号修正
1984年入学		
KENJI MORI		photographer at kenwoods photography Tokyo Kenji Mori wants to add you to their network LinkedInへのアクセスのお願いが届きました。 ホームページ：「kenwoography Tokyo」で検索
1987年入学		
松村 洋道	映画	現住所記述修正
青木 みね子	写真	今年入園した孫のスナップ写真を時々撮っています。
1988年入学		
本間 孝		校友会様、いつもご連絡ありがとうございます。このたびは、校友会の終結のご連絡を頂き残念に思うとともにお疲れ様でした。現在は富士フィルムイメージングシステムズ(株)でフリーイト営業部に所属し、主に写真展作品製作とギャラリー運営の営業をしています。昨年8月に転居しました。
1989年入学		
五島 三徳	映画	変更ありません
1990年入学		
石倉 栄子		2005年東京から新潟へ。2011年帰京。都立高校の家庭科教師になって8年目になりました。学校行事の撮影で活躍しています。高校2年生の担任です。私の卒業クラス（植田先生クラス）の同窓会を呼び掛け、8月に開催の運びとなりました。最後になりましたが、東京写真専門学校と東京ビジュアルアーツ専門学校の卒業生のご多幸を心よりお祈り申し上げます。

1991年入学		
徳山 龍一	写真	現住所変更・転居のため
弘保 佳子	写真	44号でFOCUSは終わり？！ですか。今まで校友会役員の皆様に頑張っていただき感謝しております。この号が出るまでに色々クリアになっていればよいですが…いったんお疲れ様です。そして有難うございました。
茂田 裕信	映画	東京ビジュアルに校名変更の時卒業。1-Fクラス・小添さん担任。
1992年入学		
瀬戸 弘之	画	変更ありません
1994年入学		
星 慎一郎	映画	前略、写真の仕事を辞めてからは、姉のマイナバーカードの写真を撮ったくらいです。最近携帯は、スマホにしました。電話はスマホだけにしました。前はパソコンを使っていたのですが、今は使っていません。懇親会は仕事が平日休みなので参加できません。最後にFOCUSを送っていた、役員の皆様有難うございます。敬具
1996年入学		
安陪 統子	マスコミ	変更ありません
大宮 孝介	音響	勤務先変更
1998年入学		
金 権幸	写真	朝晩日中の気温の差が激しいです。お元気でしょうか。遅くなりましたが、父へのお悔やみの言葉を校友会を代表して送って頂き御礼申し上げます。今年11月、両親の結婚60周年を前に、父は最愛の母や私を残して、一人で極楽世界【天国⇒仏教の用語】へ旅立って3ヶ月が過ぎました。たまに父を思い出し辛いです。喪中はがきにつきましては、こちらでは送る習慣がないので郵送できないかもしれないこと、ご了承ください。
樋口 牧子	マスコミ	昨年挑戦していた校正士認定試験に今年の夏(2018年)に3度目の受験でやっと合格する事が出来ました。現在は東京で勤めていた頃お世話になった校正の先生から校正の課題をいただき、修行させてもらっています。募集が少ないので難しいですが、在宅校正を実現させたいです。FOCUSも次号で最後との事ですので、毎年発行して頂いた方々、有難うございました。大変な作業だったと思います。欠かさず丁寧に対応・発送いただき感謝します。懇親会はずっと参加してみたいと思いつつも、東京にいた頃には多忙で行けず、実家に戻ってからは家の事で精一杯だったり、また、恥ずかしながら、多忙を理由に同級生の方々と連絡を取っていなかったりと、知っている方がいるのか不安で不参加にしています、申し訳ありません。でも、東京に行く用事や、ほかの理由で行く機会があったら、写真展だけでも行けるようにしたいです。長文失礼しました。
2003年入学		
宮本 大介		住所変更



西村 多美子
「MY JOURNEY」
 Le Plac' Art Photo
 (パリ)
 2018年11月7日
 から30日
 (年末まで期間延長)
 パリで個展を開きました。



藤田容子
 2018年7月13から15日
 演劇集団いっわさ第13回公演
 麻布区民センターホール
 舞台に出演。「雑誌・暮らしの手帳・創刊70周年記念! 様々な世代に愛されている名作エッセイを舞台化しました」(パンフレットより)

出版案内



富山愛子写真集
「マダガスカル」
 東方出版 定価1,500円
 e-mail :
 aikophoto88@gmail.com
 アフリカ西インド洋に浮かぶ巨大な島国・マダガスカルで撮影。



諸河 久写真集
「モノクロームの私鉄原風景」
 2018年12月発売
 交通新聞社刊
 B5判 151頁
 定価2,800円

写真展開催予告



諸河 久写真展
「ハッセルブラッド紀行／東ドイツの蒸気機関車」
 2019年10月8日から14日 KAF GALLERY
 鉄道写真家である諸河氏が、東西ドイツ統合前の1977年に東ドイツで撮った貴重な蒸気機関車達を、40余年を経て、初めて世の中に発表する写真展です。

DIGITABLE 2019 Excite

2019年10月5日から12日(※7日(月)は休館日) 江東区森下文化センター展示ロビー

デジタル写真技術研究会13周年展。デジタル130回目の勉強会に合わせて、今年も大型ポスタープリントで「江東区の橋と水辺」をテーマとした展覧会になりました。合わせてセミナーも開催：2019年10月12日 森下文化センター セミナールーム。卒業生、渡邊英昭・平野正志さん参加。

【編集後記】 いよいよ千秋楽。思えば私自身がかわってきたFOCUSだけでも30年ほどはあろうかと思う。毎年夏前に編集を終え、9月に発行してきたリズムが無くなってしまふのかと思うと寂しい思いもあるが、それは次の世代に譲るとして、老兵は静かに去りゆくのみだろう。日の出は希望・発展を、夜は終焉をと表紙は会長にお願いした。次の世代にゆだねる希望へと引き継いでいってもらえることへの期待も含めて。未来永劫とは言えないが、長く発展して欲しいと願う。毎年楽しみにして頂いていた読者の方々からの短信が、作る側の励みにもなって長年続けられてきた。暖かな言葉を毎年お寄せいただいていた、卒業生の皆さんへは感謝の言葉しかない。(M.H)

FOCUS

東京ビジュアルアーツ・校友会機関紙 第44号【最終号】
 2019 (令和元)年9月30日発行

発行人

宮本 宏

発行

東京ビジュアルアーツ・校友会 広報部
 〒170-6001 東京都豊島区東池袋3-1-1
 サンシャイン60 1F MBE427
 E-mail tovi@zephyr.dti.ne.jp
 URL http://www.zephyr.dti.ne.jp/~tovi



甘利山にツツジが咲く

甲府の明かりや富士山

満月の夜はツツジが月光に照らされ浮び上る

撮影：宮本 宏